北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十六年十一月十五日印刷納本
昭和十六年十二月一日發行（毎月一回一日發行）第三十一號

現地編輯

THE NORTH CHINA

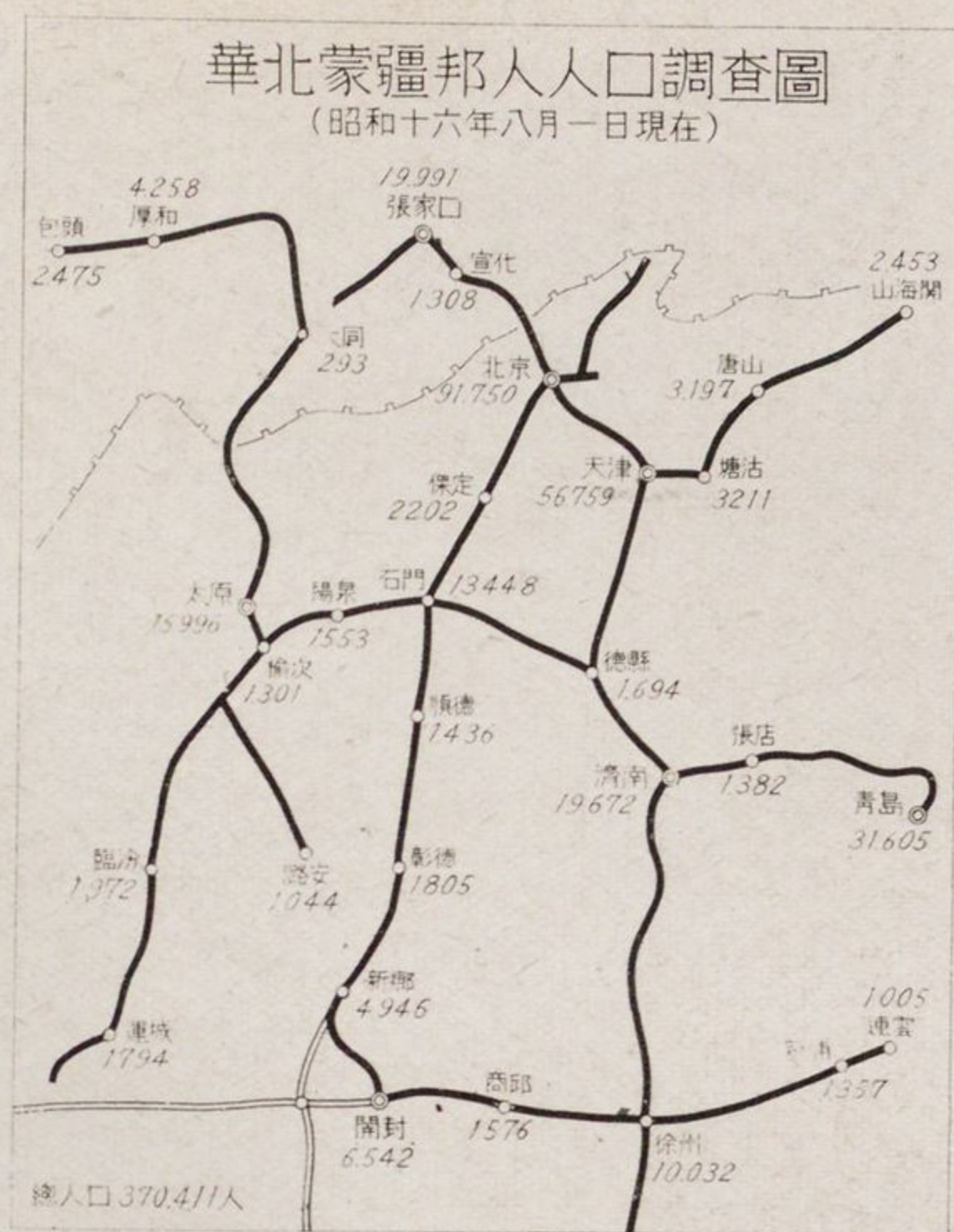
12 3

スケート——北京北海公園

冬來る

雪——北京三座門大街

Winter Sketches

北支に於ける日本人

Japanese in North China

姑娘と市場へ、臨汾にて

北京日本國民學校兒童の登校

北支には未開發のあらゆる資源が無盡藏に有りながら徹底抗日を以て國是とする蔣政權下にあつては日本人の觸手を許さなかつたのである。そのため事變以前に於ける北支在留の邦人は總計四萬二千五百人に過ぎなかつたのであるが、事變はじまり、その進行につれて、建設、開發、交通、通信、指導と種々の要求に應じ、進出した北支の邦人は、いまや三十八萬人を突破するに至つた

これ等の人々は東亞新秩序建設に必須な資源の開發に挺身するはもちろん、日華親善の代表者として日本及び日本人を彼等に認識理解せしめることに努力してゐるのである

北支に於ける日本人

北京西郊新都市建設

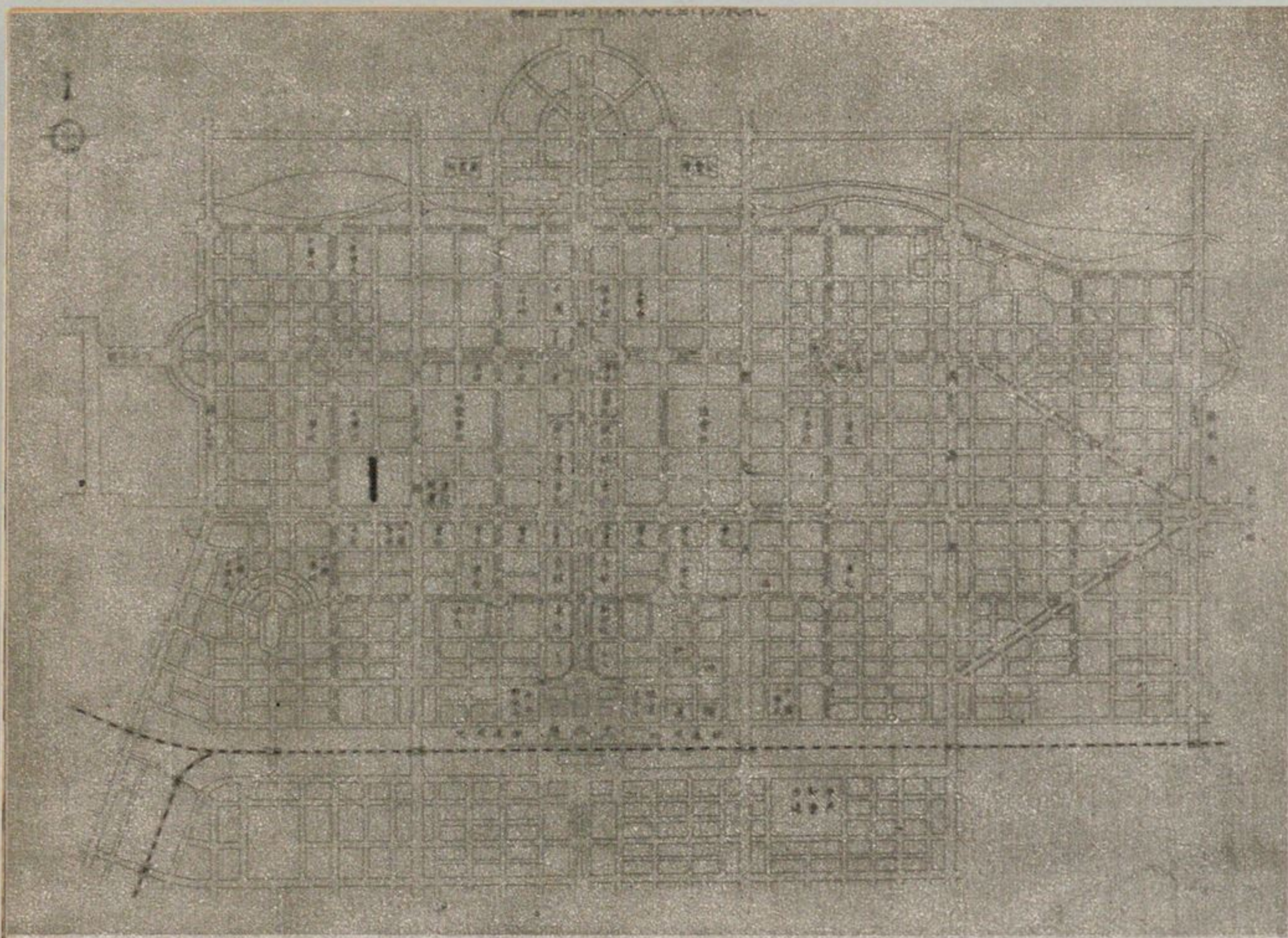
The New City outside Peking under Construction

住宅街の空地はすべて菜園に

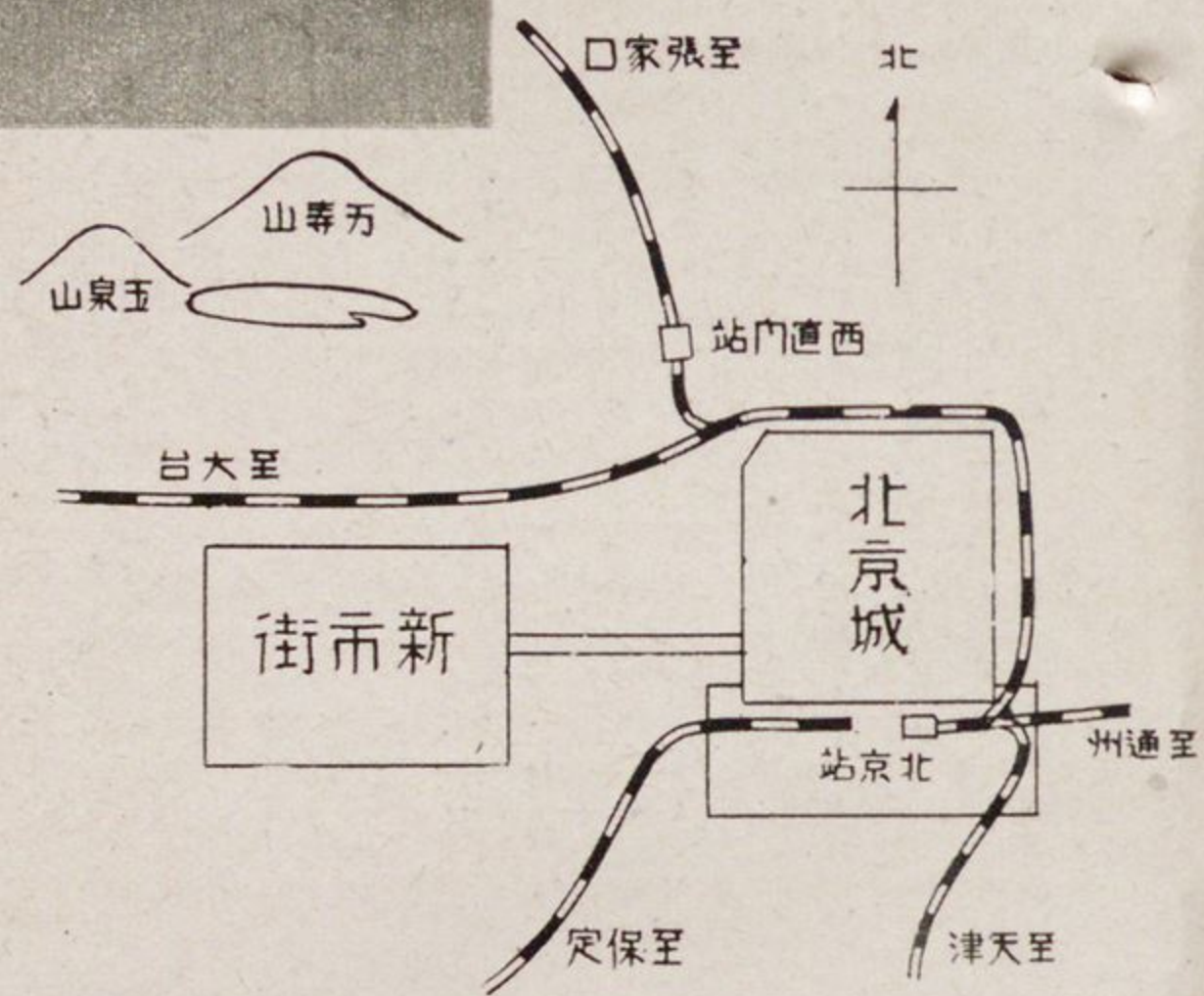
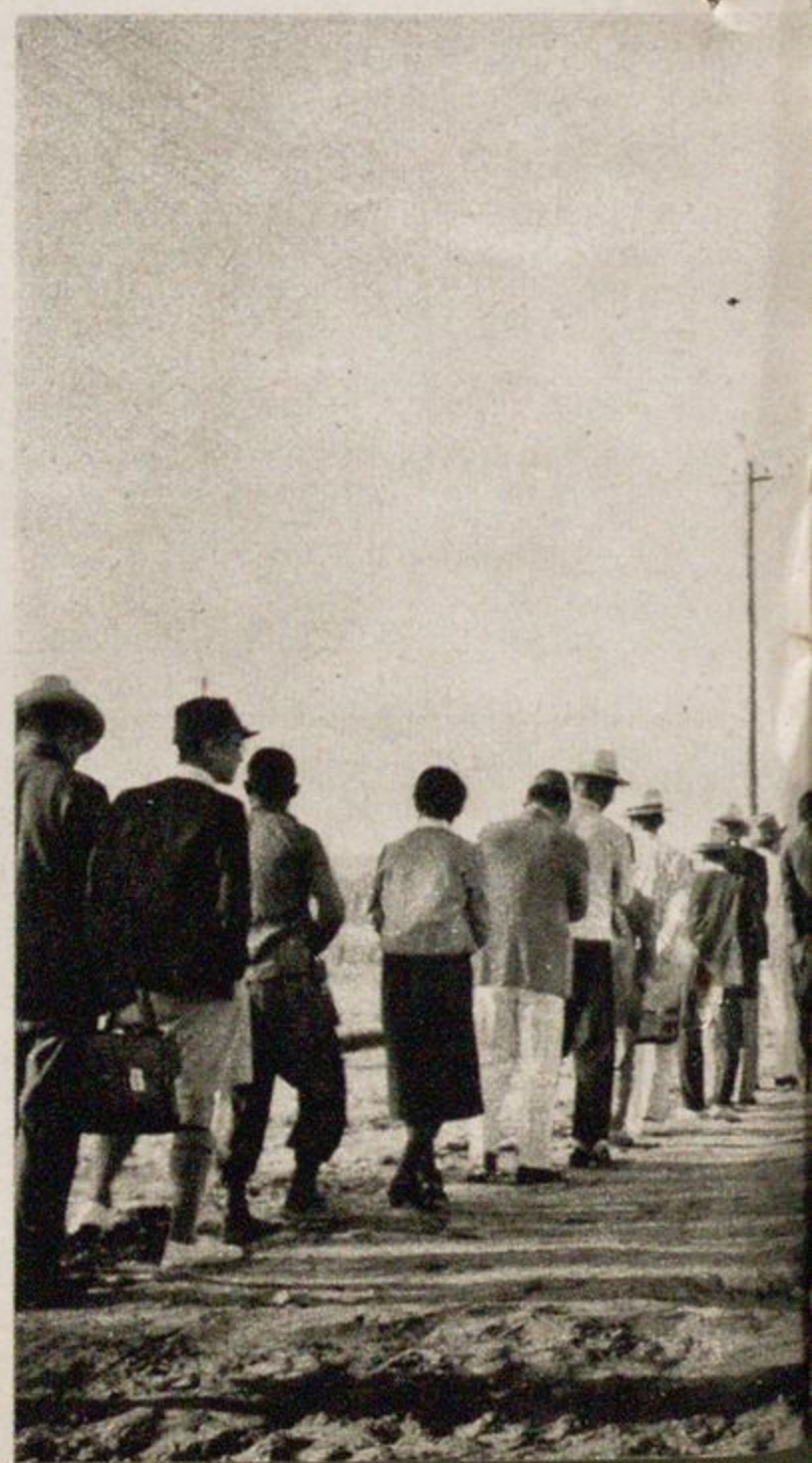
新舊市街をつなぐ大道路建設のため、北京西城の一角を取壊すことになつた

北京は北支の政治經濟の中樞として未曾有の發展をくりひろげてゐる。邦人の居住も北支の諸都市中最も多くその建設活動の據點となつてゐる。從つて北京の市内は現在でもすでに激增する邦人を抱擁しきれない狀態にあるここに於て建設總署は新市街の第一期計畫を立て、資材の不足にもかかはらず、着々と計畫を實現させてゐる

バスで通勤

あらゆる資材難を克服して工事はすすむ

案によれば、新市街の位置は阜成門から西へ六キロ、萬壽山の南に當り、その西方七キロの地點に一文字山、又、西北方に西山の名所を控へ、南方は冀東平野を展開し、自然の公園さながらの環境である。面積六百五十萬坪、三十萬の人口を收容する豫定であるが、世界の近代都市を參考として苦心設計されたものだけに近い將來には天下の理想都市が出現するわけである

住宅街の一部

華北交通女子青年隊の舞踊體操

Pioneers of Railway Development
in North China

北支に於ける日本人
若き建設戰士

北支に於ける最大の會社である華北交通の日人從事員三萬人の中二十才から三十才迄の獨身の男女青年社員を網羅して鐵道青年隊が結成され、專ら社業躍進の中心力推進力となつてゐる。そのうち男子青年隊は昭和十四年、青年各層の再編成の云々される以前いち早く結成されたが、爾來約一萬一千人の青年が現役兵同樣の猛烈な軍事教練の他各種の講演會、時局研究會、讀書會を持ち新大陸建設の礎石たるべく鍛錬されてゐる。女子青年隊は本年九月約二千名の獨身社員によつて結成され、建設に孜むるものの現實を生き、妻として姉妹として又母として美しく優しくある上飽く迄も強く雄々しくあれかしと日夜錬成の實を擧げてゐる
國運を賭して戰ひ國力を擧げて興亞の大業に邁進しつつある今日、政治、經濟、文化、產業の大動脈たる華北交通の青年社員がこのやうな組織をもち錬成されつつあることは洵に注目すべきことであらう

國策會社新入社員の北京到着

Delicacies for the Eighth day
of the Twelvth month

臘八粥

師走の聲を聞くと、ああ又一年暮したかとしんみり後悔とも何ともつかぬ氣持になるのが凡人です。その師走の事を中國では臘月（ラーユエ）——日本でも舊臘と云ふ字あり——と云つてこの月の八日になると臘八粥（ラーパチヨウ）を食べます。日本の禪宗のお寺で行はれる臘八會と云ふのはやはりこの日をお釋迦樣成道の日として朔日から八日の夜明までお粥を啜つて坐禪するのですが、これは中國から傳へられたものと思はれます。ともかくこの臘月八日は年の暮の序幕とも云ひませうか、この日を過ぎると愈〻年越準備など急に慌しくなります

臘八粥は北京人の俗説によると避寒避邪になるさうですが、これはお釋迦樣が難行苦行に衰へなさつた時、村長の娘ヂスヤータが食物を獻じたと云ふ傳説に緣起があるのでせう

この粥は、なかなか念の入つたもので（實際はこの頃ずつと簡單なものが多く、又全く作らぬ家も多いのですが）八日は朝も早くから仕度にかかり（實は前の晩から煮立てる）出來上るとまづ祖先と佛前に供へ、親戚知友に贈り、最後に家族、犬猫、甚しいのは庭の木などに迄塗りつけます

それから中國では粥と云つてもいろいろあるので、その中で平常でも市中の飯館で食べさす粥に小米粥と云ふ（粟粥）があります。北京では毎年霜が降

北京の或る粥廠で貧民に粥を施してゐる

ると「粥廠（チヨウチヤン）」と云つて、乞食や貧乏人にお粥を施す慈善事業が始まるのですが、その施粥がやはり小米粥であります

臘八粥の標準材料（寫眞參照）

主材料——黄米、糟米、粟、小豆
　　大麥、小麥

果　物——乾葡萄、棗、西瓜の種
　　蓮の實、青梅、玫瑰、
　　菱の實、落花生、杏仁

調味料——白砂糖、黒砂糖

右の材料は臘八前になると市中の雜穀店で取揃へてをります

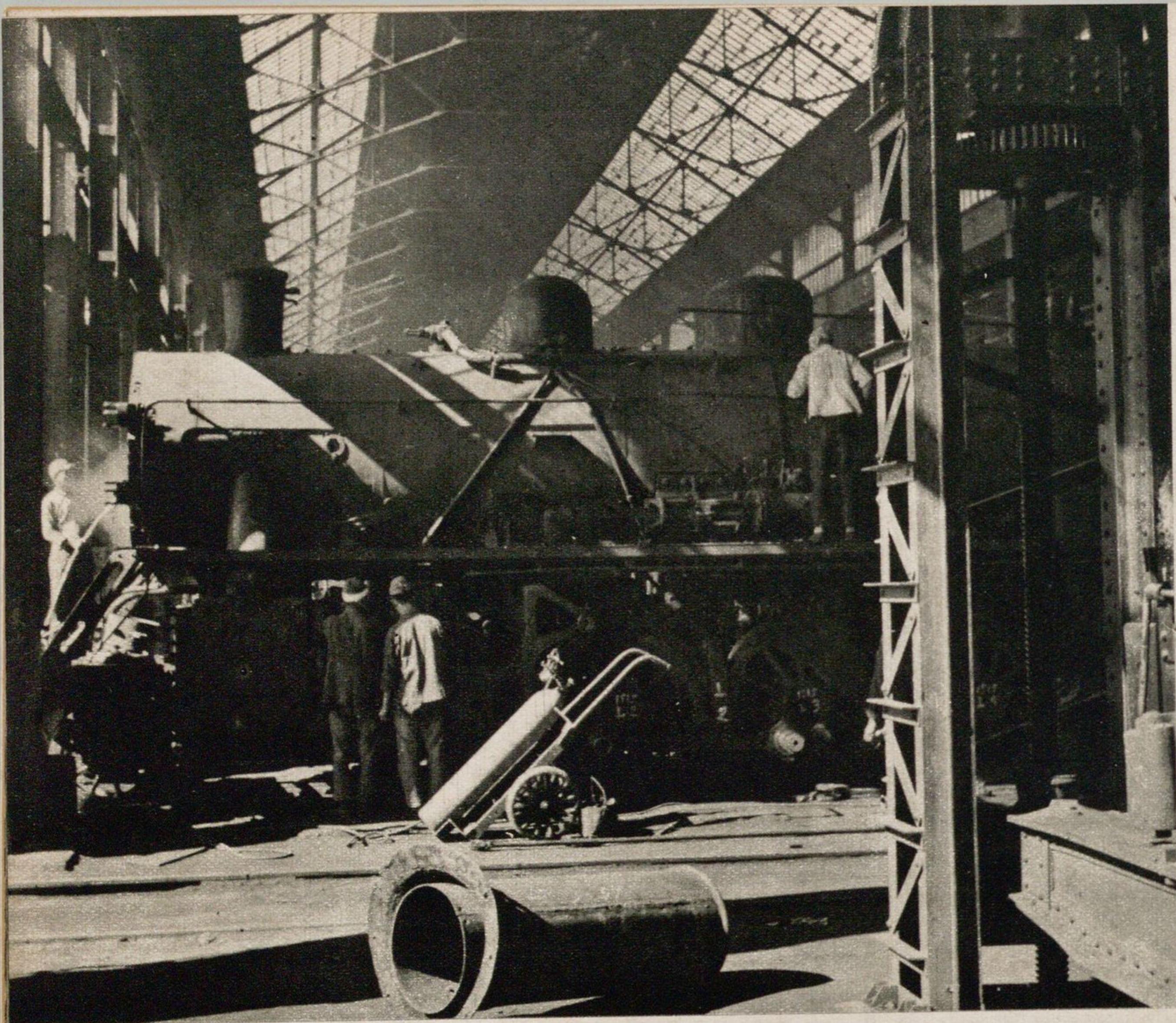
十二月八日前になると臘八粥の色々な材料が賣り出される

鐵道工場

Railway Workshops

今次事變の最も輝かしき成果の一つとして生れた華北交通會社は、率先大陸交通の經營に任じて來てゐるが、之が表面の華やかな活動の裏には、ぢみにコツコツと働く多くの陰の力を見逃してはならない。特に會社の保有する多くの鐵道車輛を何時も完全なる狀態に整備修繕をする仕事をしてゐる鐵道工場は、一般人には一寸知られない存在ではあるが、極めて重要なる役割を務めてゐるのである

元來中國鐵道の殆どは西歐諸國の借款鐵道として敷設せられたのである。從つてそれ等諸國は自國の車輛や鐵道用品を多く賣込まうとする植民政策を强行したため、斯うした基礎的な技術の生產部門は極めて貧弱な狀態にあつたのである。更に今次事變により施設破壞、機械の持逃げ等が行はれたため、一層劣惡化し、接收直後に於て卓越せる日本の車輛技術を移しても、猶戰時鐵道の特色たる多くの事故車輛復舊と各國から入込みの各種各樣の一般車輛の修繕を平行的に此の現地で行ふことには、相當な無理があつたのである。然し、關係從事員の血みどろな苦鬪は未だ數年を出てざる今日、既に設備改善に或は技術向上に着々其の効を顯し中國人の良き師範として、技術日本の誇りを大陸開發の一翼として示しつつある

バークシヤと朝鮮との雑種

The Hare and the Pig

豚と兎

農家の副業としての養豚、養兎はそれを賣つて現金收入を得る事の他に廐肥を利用することができるのも目的の一つである。これ等の飼養には特殊の技術や熟練を要せず、農家の餘剩勞力を十分利用することによつて僅少の資本で資金の迅速な回收を圖ることが出來る

華北交通が愛路民生工作の一つとして副業畜産の奬勵優良種畜の育成配付を行つてゐる所以もここにあるわけで、今養豚、養兎の利益に就いて觀るに、大よそ次の如くである

一、養豚――肉は生肉及び加工品となり、脂肪、血液等臟物は各種食料品醫藥となる。支那豚毛はブラッシュ原料として世界的に有名で、一箇年黑毛百五十萬斤、白毛十五萬斤を輸出してゐる。その他骨蹄に至るまで藥品に或は肥料に利用され、一部分も廢物とするところが無いのである。更に廐肥として一頭一箇年少くとも三、四千斤（百斤當三十五錢）を生產し、耕種農業にも利するところ大なるものがある。然し、支那在來豚は晩熟にして、生體量小型八〇瓩、中型一五〇瓩程度であるため、華北交通ではこれ等在來種改良の目的で滿洲、朝鮮よりバークシヤ品種を移入し、雜交を行つてゐるが、この一

アンゴラ種の子供

回雜種は發育狀態が良好で、肉は、體の深さ、幅等を增し、生體量も一〇〇瓩乃至二〇〇瓩に達してゐる

二、養兎——日本でも家兎は從來愛玩用に飼育せられたに過ぎなかつたが最近兎毛皮の輸出及び國內消費が增大するにつれ、漸次產業的に飼育する樣になり、農家の副業として著しい進展を見つゝある。更に時局下軍需用品として兎毛、兎毛皮が重要視される今日、北支に於ても沿線農民に副業用家兎の飼育を奬勵して農民の福利增進を圖ると共に國家的要求に應じつゝある。華北交通で現在飼育奬勵してゐるアンゴラ品種は所謂毛用種で、生體量三、四瓩程度。美麗なる絹糸樣の兎毛は長さ二〇粍以上に及び一箇年一頭約〇・三瓩を生產してゐる。家兎飼育には特に經費を要することなく體質は强健である。生後二、三箇月の間注意すれば其後は殆んど罹病することなく、飼養管理は極めて簡單で、婦女子の手で容易に飼育せられる。特に兎は家畜中最も蕃殖の速かなもので、生後六、七月で蕃殖に用ひられ、一回六、七頭の產仔を得、一年四、五回蕃殖させ得るから、一番の種兎より、一年七〇乃至八〇頭の仔頭が得られるわけである。卽ちアンゴラ品種、軍兎を適宜按配飼育せしめ、兎毛による家內紡毛業の振興を圖る一方、兎毛皮の增產確保を期することも刻下の急務の一つであらう

苦力歸る

デッキパセンヂャーとなつて山東へ歸る苦力の家族達

河北方面へは主として汽車で

北支から滿洲へ渡る苦力の數は年々百萬を越えてゐる。その中に「出稼苦力」といふのがゐる、それは山東・河北方面から農閑期を利用して渡滿、或る期間働き若干の貯へを持つて舊正月に或は農繁期前に歸還する者のことを謂ふのである。その歸還者達の持ち歸る金額の一人分は僅かなものではあるが、合計すれば、年二千萬圓に達すると謂はれてゐる

さて、お正月が近づいた、故郷には老母や妻や子供が待つてゐる。虎の子よりもつと大切な現金二三十圓を肌身にくくりつけ、大餅を二つ三つ絲に通し、布團や枕や茶椀やさては藥罐などを背負ひ、土產らしい二つ三つの赤い紙包を大切さうに持つて、デッキパセンヂャーとなつて歸つて來るのである

產業滿洲建設の重大な要求に應へて彼等の果す役割は今更改めて說くには及ぶまい

柔順にしてしかも頑健なる苦力、愛すべき彼等に對しての呼名「苦力」は何だか吾々日本人には一種の劣等感を與へるのであるが元來此の言葉は支那語ではなく、實は英語なのである。西洋が東漸當時Coolie或はCoolyと云つて亞細亞人の不熟練勞働者を呼びならしてきた、その音譯である

だから日本人の、彼等に接觸の多い者は華工、工人などと呼んでゐる

Chinese Coolies back from Manchoukuo

善良、從順、無邪氣、しかも頑健である

圓明園

圓明園は北京の西北にあつた名苑で、淸の聖祖がその子、雍親王に作つて與へたものである。高宗の時には更に洋式の建築も營んでヴエルサイユに模し當時東洋第一の莊麗なる建物であり、歐洲にも知られたものであるが、咸豐十年（西紀一八六〇）英佛聯合軍のために燒毀され歷代の皇帝の集めた天下の珍寶もこの時ことごとく掠奪されてしまつたのである

その前年卽ち咸豐九年の五月英公使ブルースと佛公使ブールブーロンとが天津條約批准のために軍艦で白河河口にさしかかつた時淸人は太沽砲臺からこれを砲擊した。艦隊は損害を受けて一時上海に引き揚げ、本國から第二回の遠征軍英兵一萬、佛兵七千をもつて聯合軍を組織し翌年六月再び來襲、太沽砲臺を占領し、天津を陷れて、八月末北京城外に達し同日聯合軍の一部は北京の西北一里半にある圓明園の離宮を破壞しやがてこれを燒拂つたのである

皇帝文宗は皇后と共に熱河に蒙塵せられ、恭親王をして折衝に當らしめ、同年九月、北京條約を締結した。これによつて英國は香港の對岸九龍半島を割讓せしめ、天津を開き、英佛各八百萬兩の償金を取つた

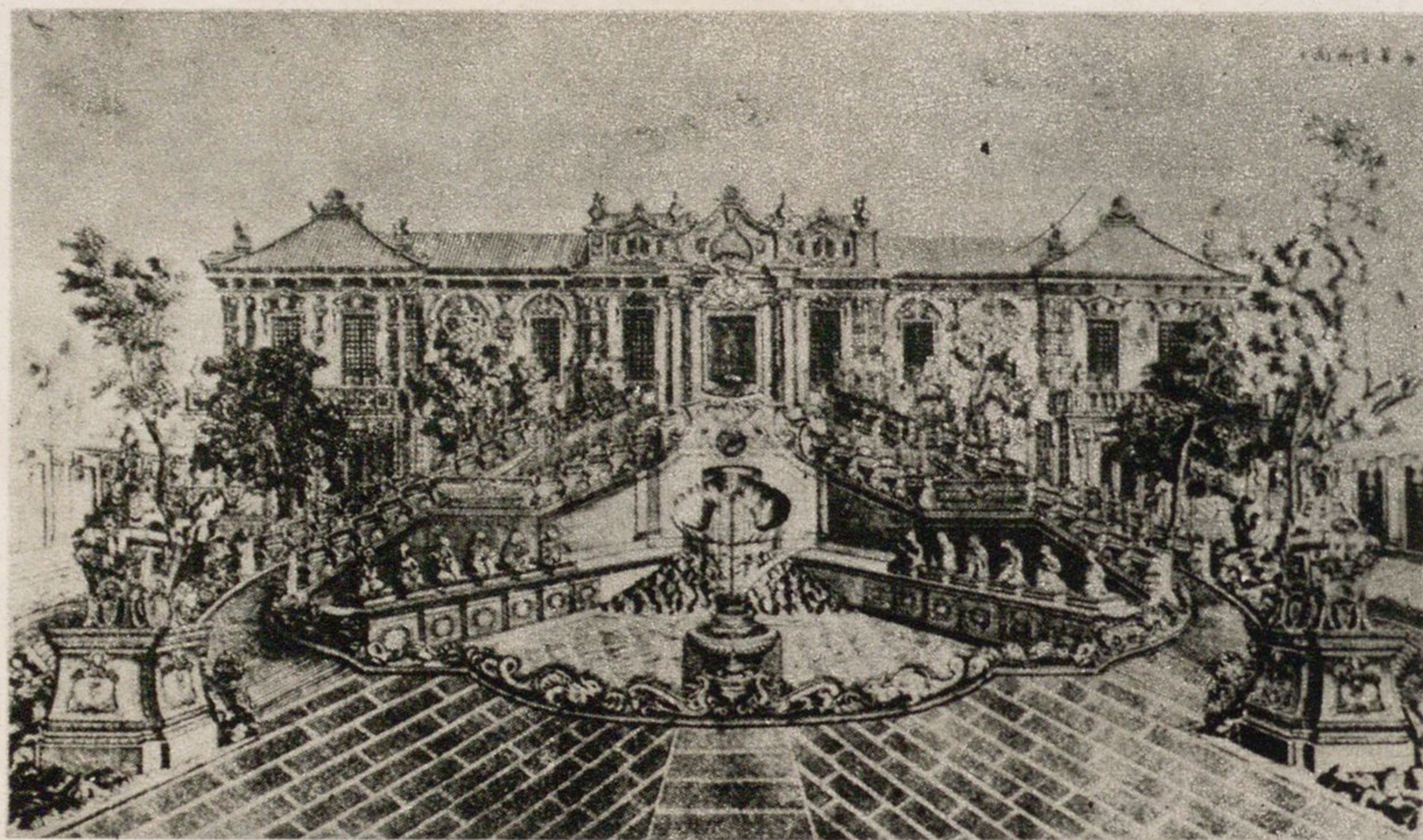
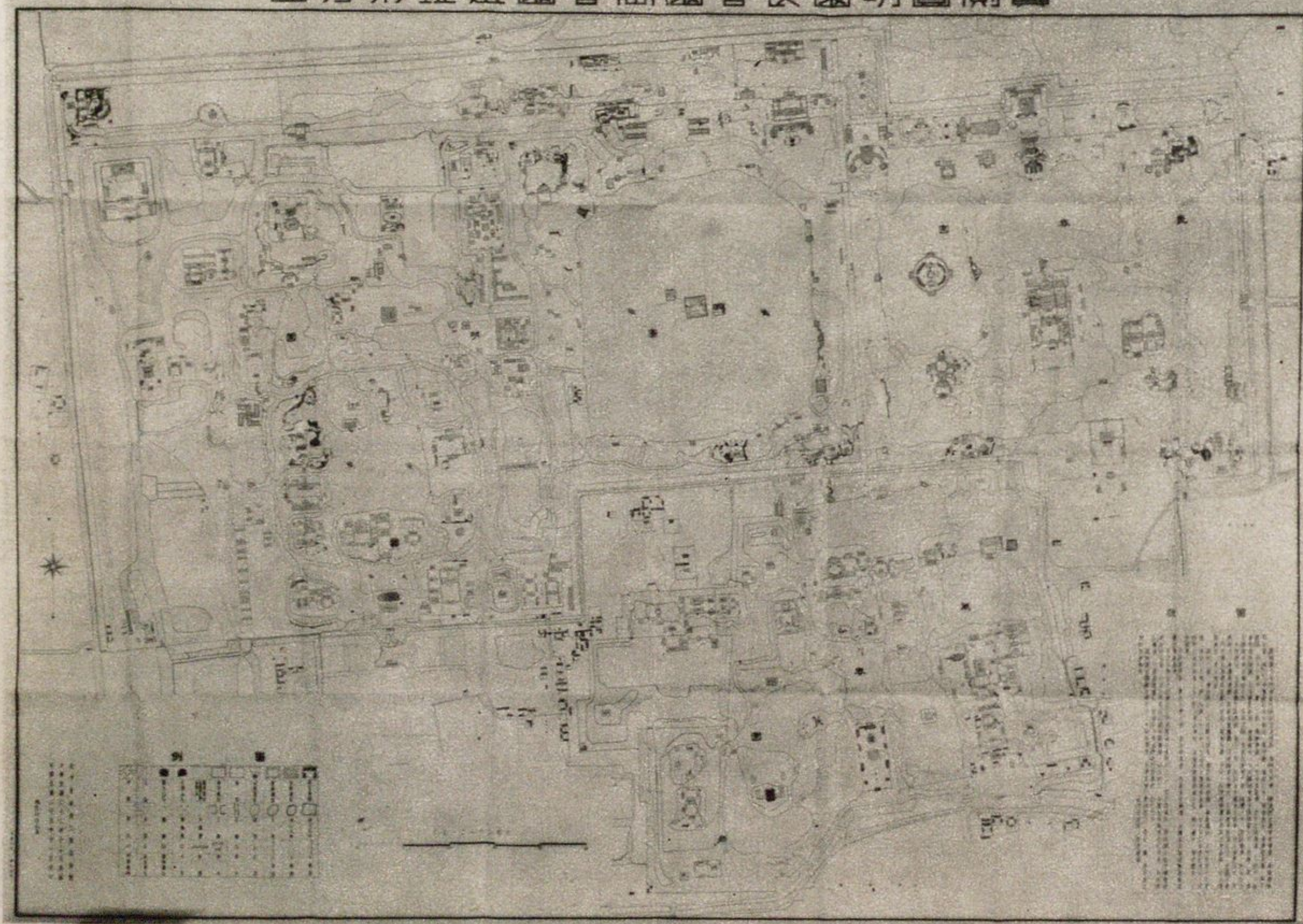
茫々たる葭原の中に殘つてゐる石材は破壞された當時をものがたつてゐる

圓明園の廢墟

Yuan Ming Yuan (The Old Summer Palace)

當時の建物の一部分を示す・乾隆銅版畫

實測圓明園長春園萬春園遺址形勢圖

港の一部

海州は鹽の町である。謂ふ所の「支那西北開發工作の先驅」として、支那本部を東西に横斷する隴海線の起點、連雲港から西走三十粁に位してゐるが、そこを要として背後へ扇の骨の如く發達、海州をして水陸交通の要衝たらしめてゐる諸運河にも「鹽運河」と、緣の名が與へられてゐる

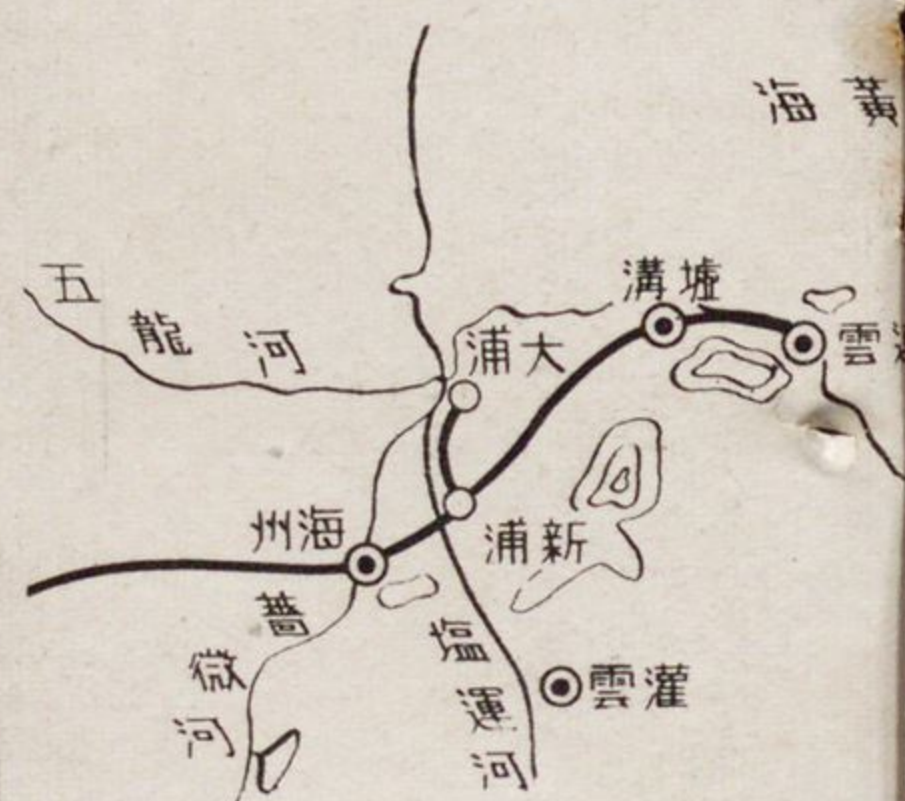
その背後は「江浙穗らば天下飢ゑず」の農產地、江蘇省の大平野である。然し、偶ゝ海岸との間に名山雲臺山を主峰とする一連の山を起伏せしめてゐる地勢の爲、由來、海上警備の樞地となり又、支那本部に於ける南北勢力接觸の最右翼地として屢ゝ兩者抗爭の據點となつた。卽ち「泗州を得ば淮(淮河)北を制し、海州を得ば、山東を取り得る」の言はこの事情を物語る

海州を一大集散地とする鹽は、京山鐵道沿線の長蘆鹽、青島中心一帶に產する山東鹽に對し海州鹽と稱され、產出は年數十萬噸に達する。因に北支に於て鹽は石炭、鐵、棉花等と共にその重要資源になつてゐる

海州の人口約三萬、產物は上記の鹽を大宗とするが、小麥を始め農產物も見逃せない。日本人の進出も一昨年三月の皇軍入城以來、日に增し、現在千數百を算してゐる

海州

Hai Chou and its Salt Industry

鹽の山

海州の中心街

菊と棗

Chrysanthemums and the Chinese Jujubes

北支では日本のやうな立派な菊の花は見られないが、野生のものは到る處に見受けることが出來る

天津や北京あたりの菊作りは一種の野草に接木をする。接木したものは、挿木のものに較べて、葉も花も大きく育つからである。この技術だけは北支獨特のものらしい

延びるままに、咲くままに、放任された院子の野菊

棗は至極育ちのいい木で、山にでも谷にでも、相當アルカリの強い低濕の地でも處嫌はず生ひ繁る。北支到る處棗の木を見ない村はないであらう

その實は圓形、楕圓形、紡錘形等種々あつて、大きいのはちやぼの卵位のものもある。味は水分が多く、日本のものよりずつと甘美である。實は亦用途が廣く、加工した蜜餞は大陸を旅行する日本人にはよく知られてゐる。田舍では棗泥といつて、煮詰めて泥狀とし砂糖代りに用ひ、今でも僻村では金のかかる砂糖は用ひない。山東泰安名物の砂糖漬、河北河間の燻棗は有名である。赤府棗は酒屋に運んで棗酒を造る

壯丁は合宿訓練によつて新民精神・日語・農事・自治・自衛等の教育を授けられる

新民會指導の下に

華北人口の約八割は農民である。戰禍に喘ぎ、兵匪に呻吟し乍ら尚祖先傳來の地を守り土と共に生活する農民の姿は全く眞劍そのものである。この農村を如何にして復活さすか、全き治安の裡に安寧なる生活を求め樂土となる日をひたすら待望する農民に、限りなき愛着を寄せ乍ら新民運動は今や驀進してゐる

嘗て蔣介石は農村復興の一手段として合作社運動を展開し、福祉機關として凡百の施設をした。然し、その運營は當を得ず、徒らに官吏の私腹を肥やす手段に過ぎなかつた。農民は決して幸福ではなく光明なる道ではなかつた。新民會はこの弊を追究し農民への唯一の味方として蹶起したのである

合作社の數も縣合作社聯合會二〇七。鄕村合作社五、八三九。社員八六一、四八六。すべて、健全なる前進を續けてゐる

青少年層こそは、國家興隆の源泉であ

Reconstruction under the
Hsin Min Hui leadership

り推進力である

蓋し北支一億民衆を指導すべき新民會がこの青少年層に重點を置き、各縣總會の所在地に縣訓練處を設置したことは當然である。彼等は合宿訓練によつて新民精神、日語、農事、合作、自治自衛の教育を受け寧日なき一日の裡に新中國建設への進軍譜を奏でてゐる。而も現在縣訓練處は三百十九箇所の多きに上り、卒業生は七萬六百名を算へてゐるのである

これと併行して團體訓練を實施してゐるものに青少年團あり、婦女團あり、自衛團がある

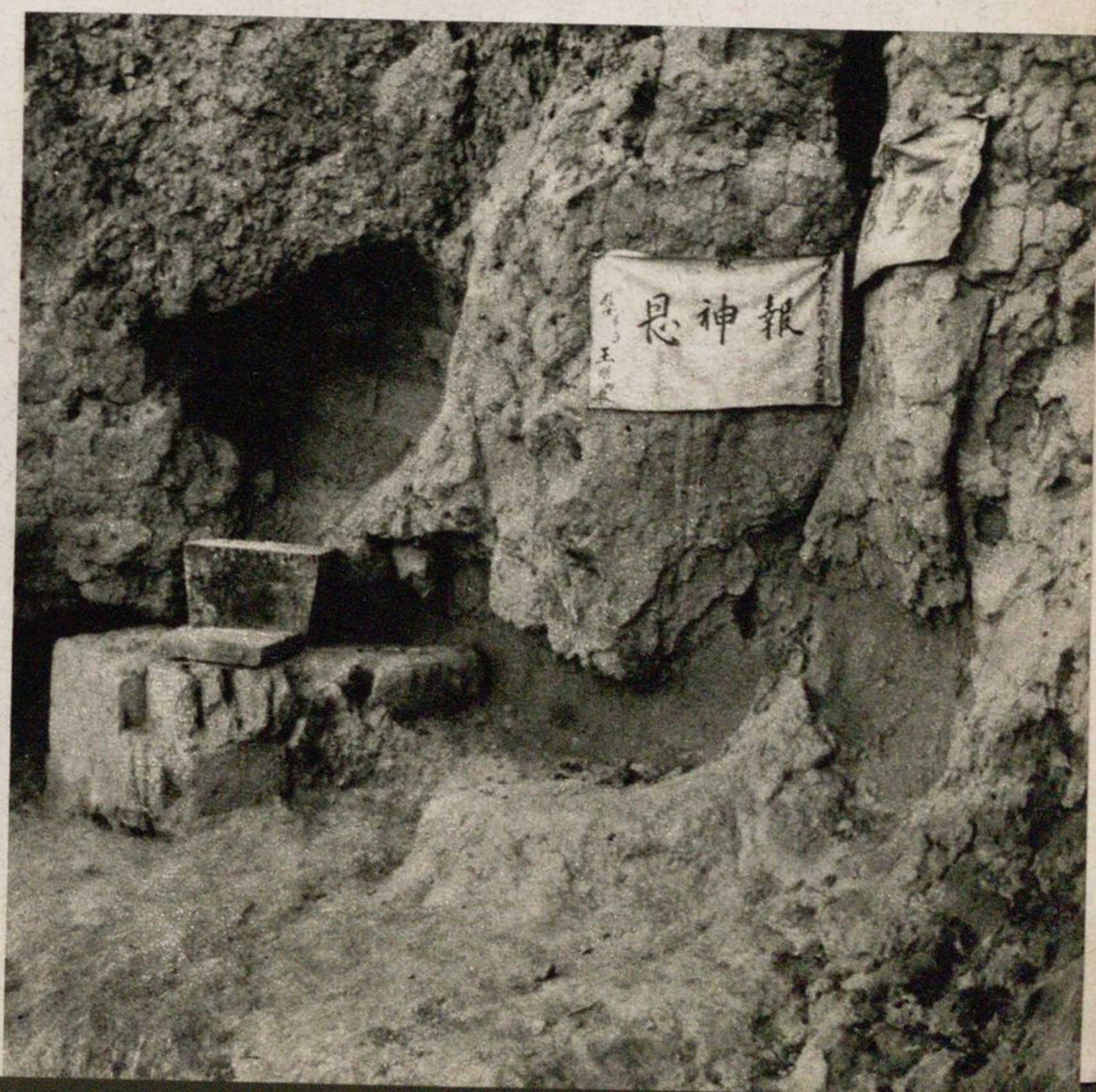
殊に自衛團の如きは單に鄉土を守るといふ消極的なものではない、自ら銃を擔ひ、當面の課題たる中國共産黨に對して積極的な挑戰を行なつてゐるのである

少數の共匪なら無手の裡に巧妙な術策を廻らしてマンマと敵を捕縛する度胸もあるし、白兵戰にもびくつかぬ鍛錬も積んでゐるのである。彼等は華北の建設の裏にある偉大なる戰士とも言へよう。現在の總數を一瞥すると

少年團員數　一三六、八五〇
少女團員數　三〇、六三五
婦女會員數　五三、七〇〇
自衛團員數　一、八六三、五八八

建設に協力する民衆

王昭君の墓地

王昭君の墓

The Tomb of Empress
(Wan-Chao-Chun)

昭君墓

漢使却回憑つて語を寄す、黄金何れの日か蛾眉を購はん、君王若し妾が顔色を問はば、道ふこと莫かれ宮裏の時に如かずと

毛延壽といふ俗な畫伯に災されて馬上ただ琵琶を彈じつつ雁門を越え匈奴の單于の幕舎に向はねばならなかつた薄幸の王昭君——漢明妃の墳と稱するものが今蒙疆に二つある。その一つは包頭よりずつと黄河の河上にあり、も一つが今此處に紹介する處のものである地は厚和の南々西方約二十五粁、和林に向ふ新しいバス道路の傍にある。高さ大方十數米の土阜に過ぎぬが、豐州の野とも呼ばれた前套の平地のさ中のこととて其の黒つぽい姿はすぐ目を惹く、俗に青塚といふが言ひ傳への様な青草の覆ふ處ではなく只その麓には枸杞といふ蒙疆によく見る藥草が碑の畔りに蔓つて小さく白い花を一杯着けてゐた

尤も王昭君の往つた匈奴の地は恐らく陰山の奥ではないかとも思はれるのだから歴史の先生には嗤はれるかも知れないが厚和を訪れた人は大抵ここに行かうと言ふ。そして枸杞の荊を別け土塊に手を掛けながら坆上に登つて昭君傷心の物語を偲ぶ。だが其の様な無心の遊士にも遠景の陰山や凉城山地の連亘、大黒河の流と共に脚下に擴がる河套の景觀に目を奪はれるだらう

墓地の上より西方を展望

右—道光・咸豐時代の常服、左—光緒時代の平民禮服

清朝の婦人の服裝

Women's dresses during the Ching Dynasty

道光・咸豐時代の衣裳——

明末から清の道光・咸豐にかけて服裝については何らの大きな變化はなかつたが、ただボタンだけが明末に比べて數多くの種類が用ゐられてゐる。このことは明末に比べて東西の交通が發達し、已に歐洲製の品物が輸入されてゐたことを示すものである

右―清代を通じての常禮服、左―清末の蘇式

常禮服

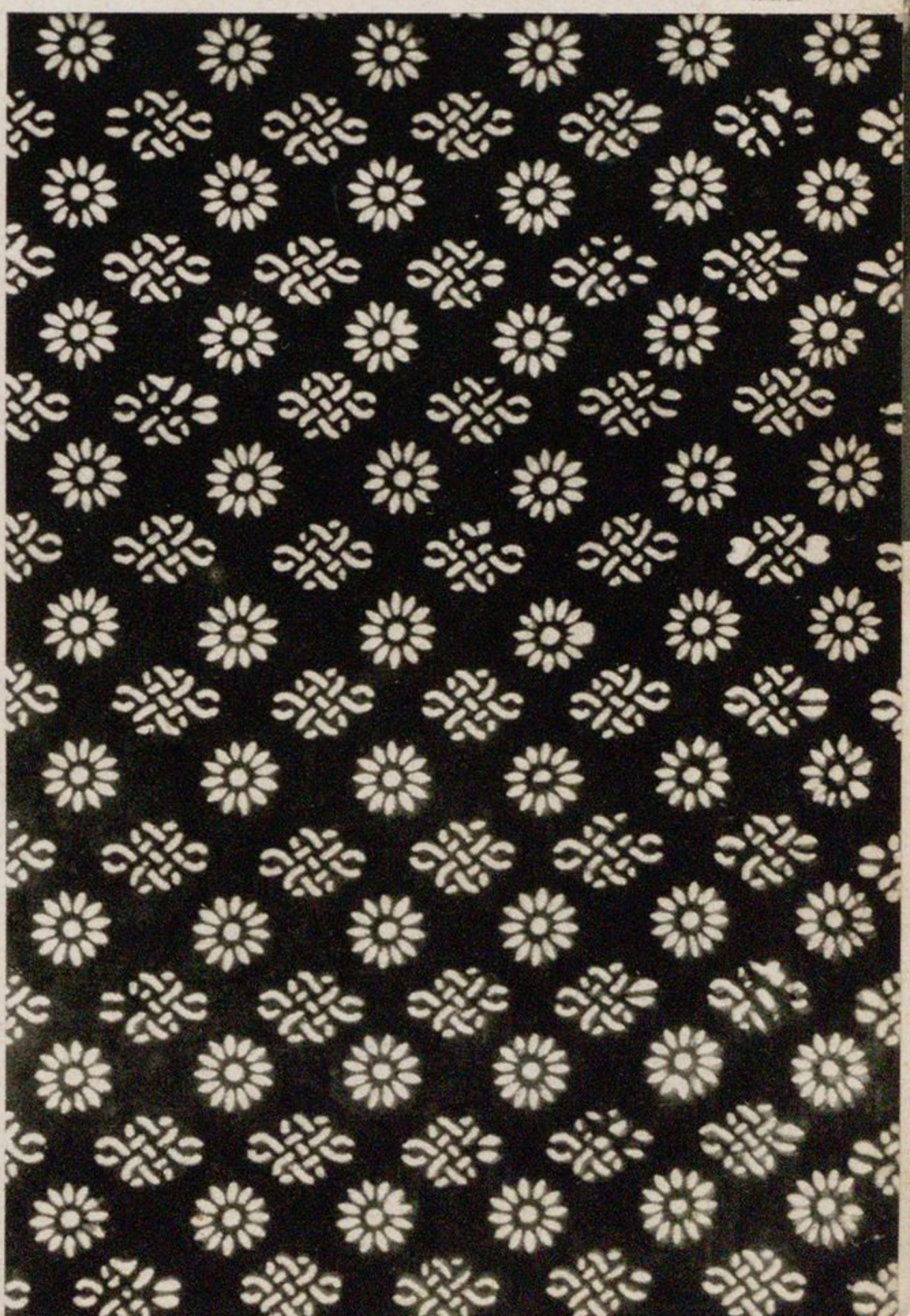
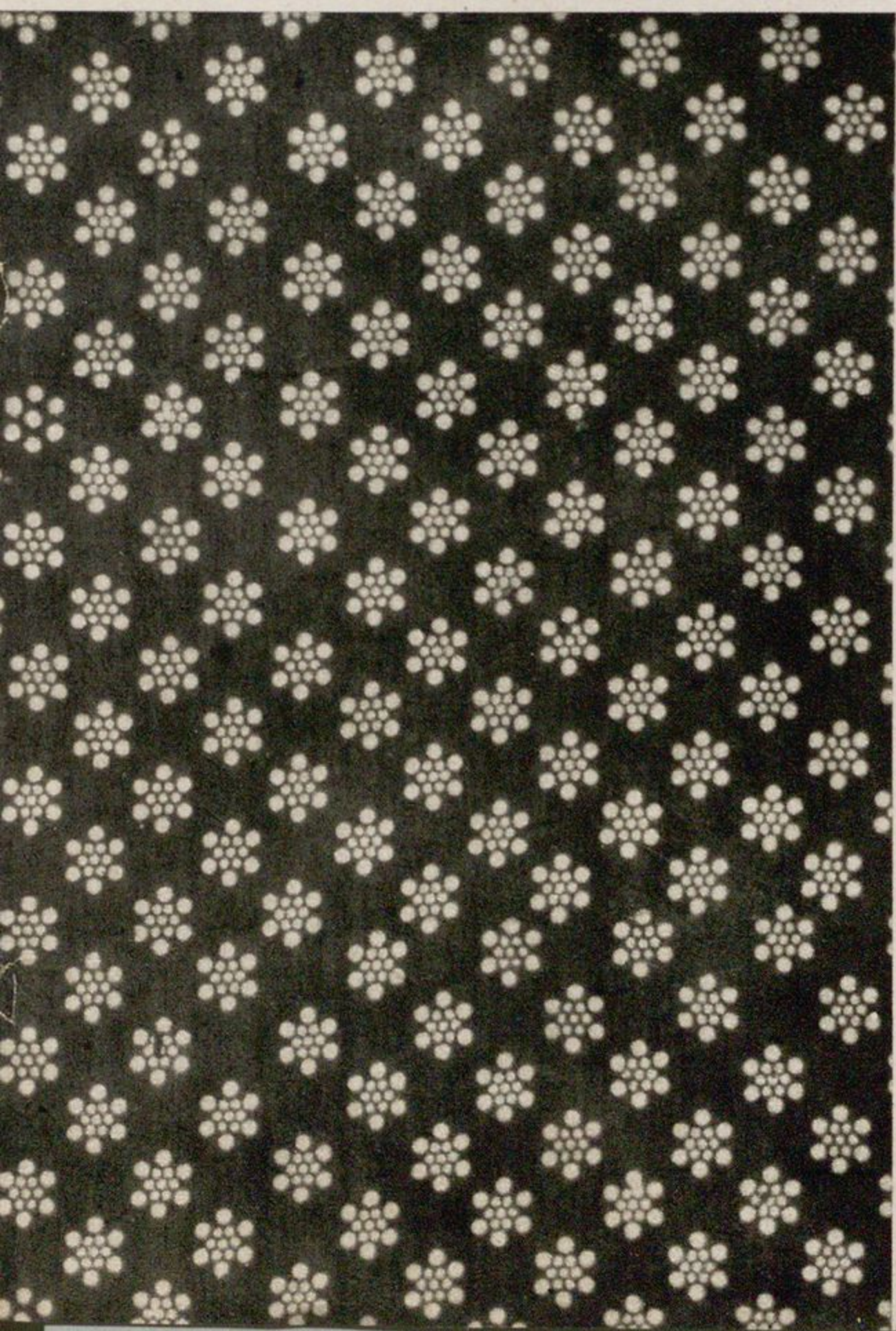
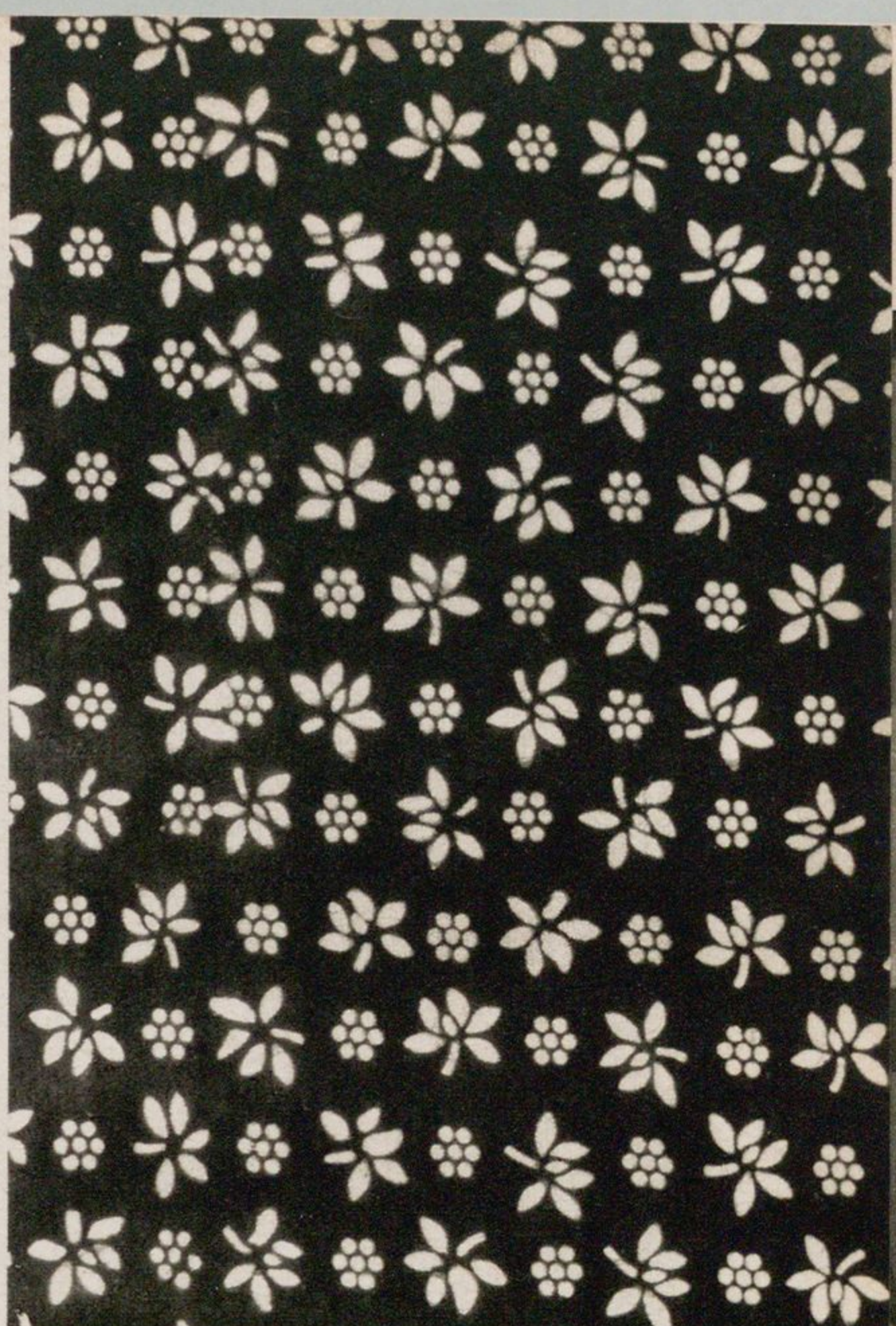
同光時代の衣裳――

この時代の婦女子は、慶事がなければ雲肩（肩の飾り物）を使用しなかつた。又他の時代と異つてゐるのは叮嚀裙を用ゐたことである。これは裙（スカート）の一種で帯の下に銅の鈴をつけ、歩く際、叮嚀々々と音を出すのでこの名が起つた。同光の時代は清代のなかでも奢侈を極めた時代で、琵琶對襟、大襟、百襉、滿花、洋印花、一塊玉などといふ衣裳スタイルがあつた。又鑲滾（衣の裙に縫ひ付けるレース）には大きな費用をかけてゐる。その名稱にも白旗邊、金白鬼子欄干、牡丹帶、盤金開絲などがあつて、一枚の衣裳の費用の四割は鑲滾にかかつてゐる

旗女の服裝――

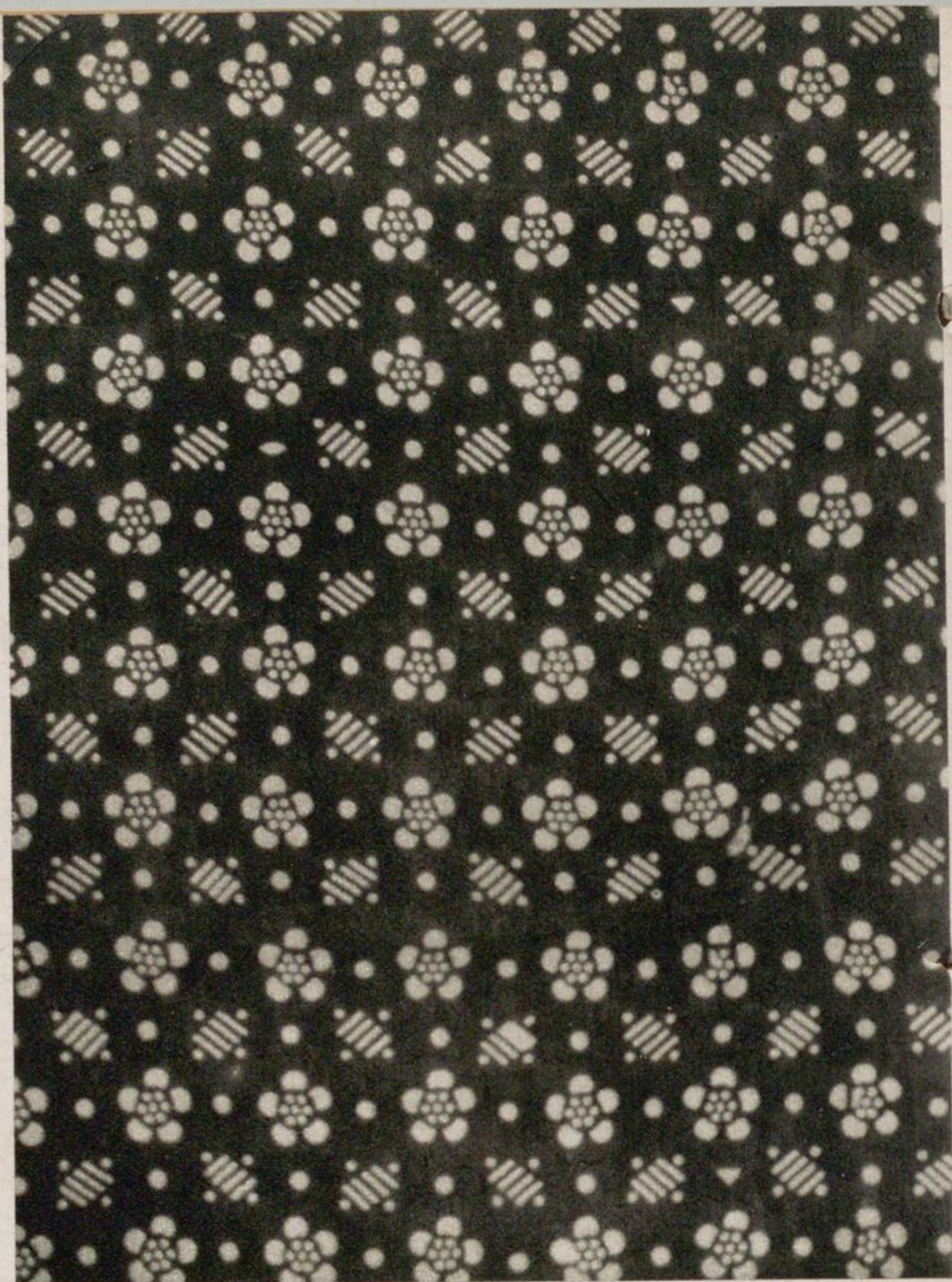
清初旗女の裝束は穿耳（耳に孔をあけること）と髻の形をのぞいては男のそれと變りがなかつた。又漢代の服裝と略同じく、異つた點といへば裙（スカート）を用ゐてゐること、衣裳が大きく短いこと位に過ぎない

髻は盤圓髻、大拉翅髻が流行した。清末には高底靴（ハイヒール）が旗女の間に用ゐられたのであるが、當時フランスでも時を同じくしてハイヒールが流行してゐる。現在パリーの博物館に所藏されてゐる十八世紀初期のハイヒールを見ると旗女の用ゐてゐたものとほとんど變つてゐない

印花粗布

Printed Designs on Cotton Materials

一昨年頃より北京の摩登小姐達の流行の服装として登場して來た印花布は、もともと田舍の老百姓の使ふ蒲團布？として染められてゐた

深々とさえた藍の地色から白くくつきりと拔け、みづみづしく美しいこの印花布は古くから琉球に、日本に渡つて紅型、小紋と絢爛たる花を開いた。藍一色染の印花布は日本の染の元の姿であるとも云へよう

北の印花布は藍地に白く模様が拔けてゐるが、南のものは逆に地白のものが多い。近頃北京でも南風な地白の印花布が可成りふえて來た。模様は菊、牡丹、梅、蘭、蓮、竹、寶結び萬字及び點の組合せの幾何學的な模樣が多く、皆古格を保つて味はひが深くてつつましい

單純で素朴な味ひを持つ印花布は、服裝の生地としての柄の組立の變化、更に二、三の色を加へることによつて次の發展飛躍がのぞまれる

流行の印花粗布を着た小姐達——北京萬壽山にて

印花粗布の製造

印花布を染める前、湯をふりかけて濕し乍ら一定の巾に疊んで少時ねかし皺を延ばす。（寫眞一）この代りに布の皺を延した上に藍の發色をよくする爲に膠水に浸す場合もある。模樣は毛頭紙を重ねて柄を切り桐油で固めた印花板（寫眞二）と呼ぶ厚い型紙を使つて糊置をする。印花板の產地は、華北では平定縣東溝村及び棗强縣西北大藤村の二箇所で、これが伊勢の白子に當る。型附臺の上に布を延べ、充分に水に濕し柔くした型紙（寫眞三）を布の上に置き、大豆粉と石炭を四分六分位に混ぜた日本では殆ど使はない一珍風の糊（印花麵）を鐵の箆でかくやうにして置くと（寫眞四）型紙に切り拔いてある模樣のところだけ糊がおり、防染となつて白く殘る。型紙をあげ、型の長さだけ布を前に動かして次の型をつける。この工程は工人の手練を見せて極めて迅速である。煉瓦で型紙の一邊を押へ布を動かす手法は、日本とは逆に布を板に張り型紙を動かして糊置をする。兩面に置いた糊が乾けば巾狹く疊み藍甕へ入れ、中で繰り擴げて甕の上に渡してある棒の上に疊み上げて水をきり、疊み、擴げして藍を空氣で酸化させて美しい藍色に發色させる。染め上げる中途二三度中干（寫眞五・六）し、染上り後庖丁で糊をかき落して水洗すれば、模樣は紺地の地色から白く浮び上つて鮮やかに輝く

Process of Printing Cotton Clothes

4

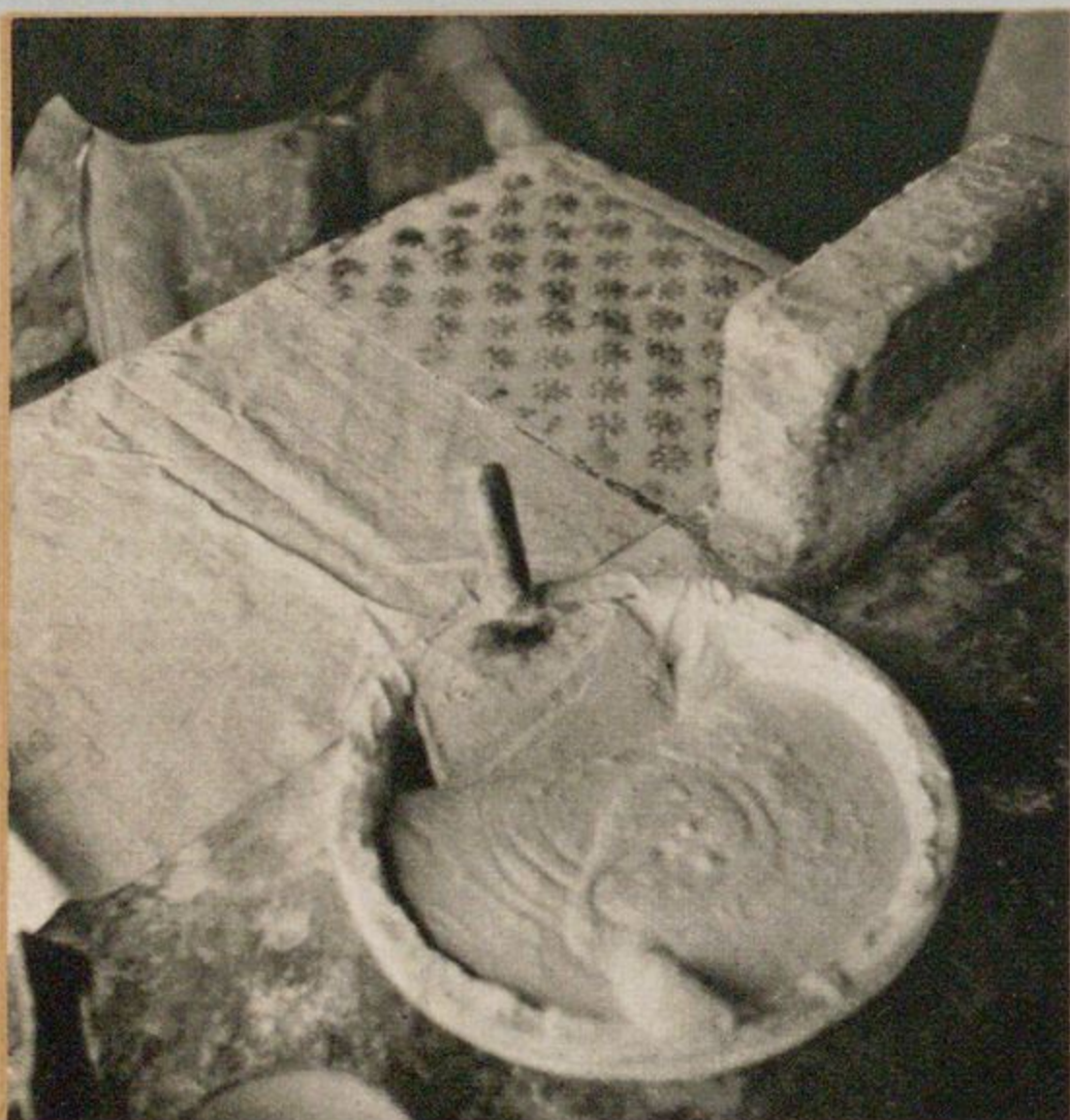
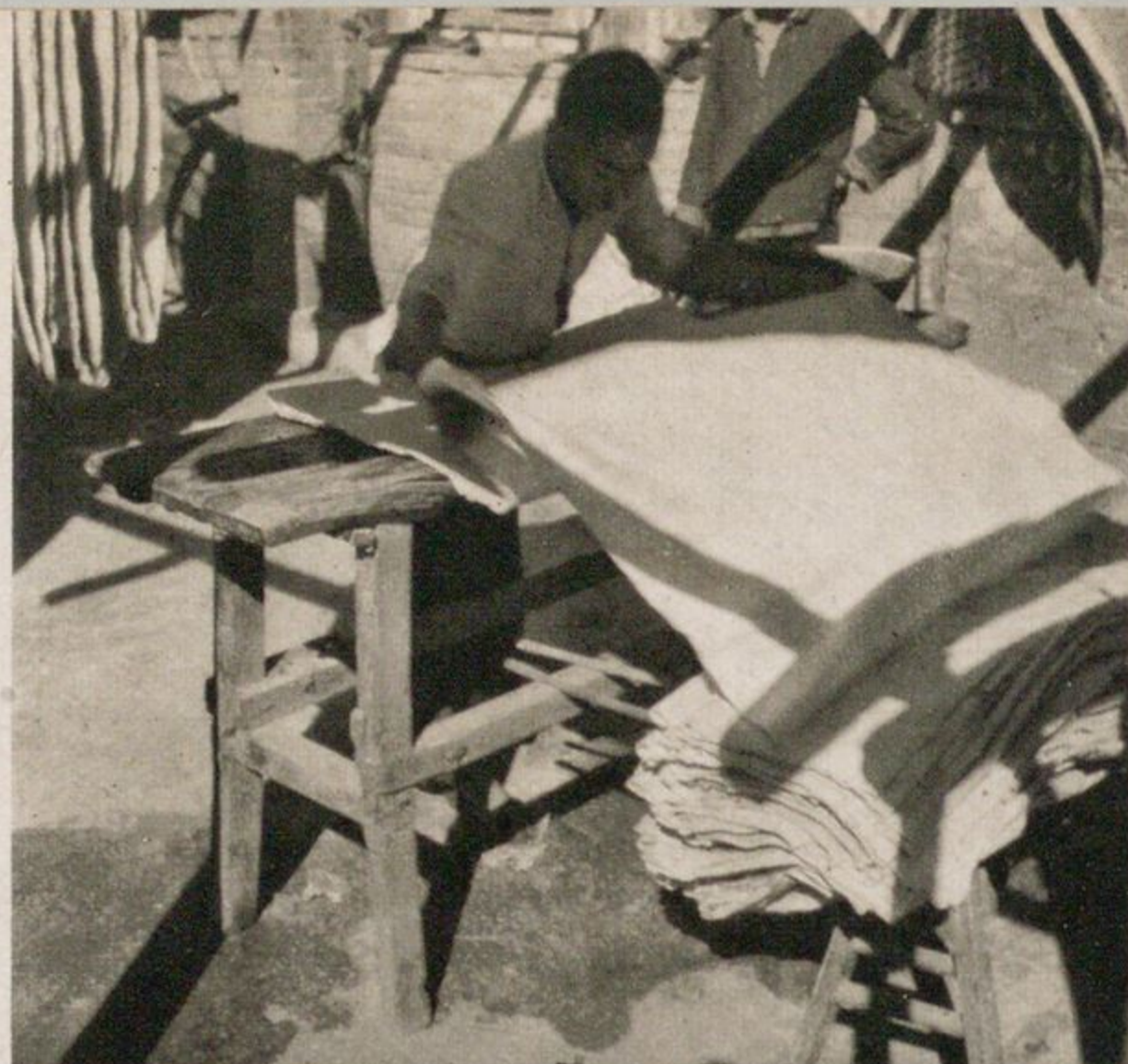
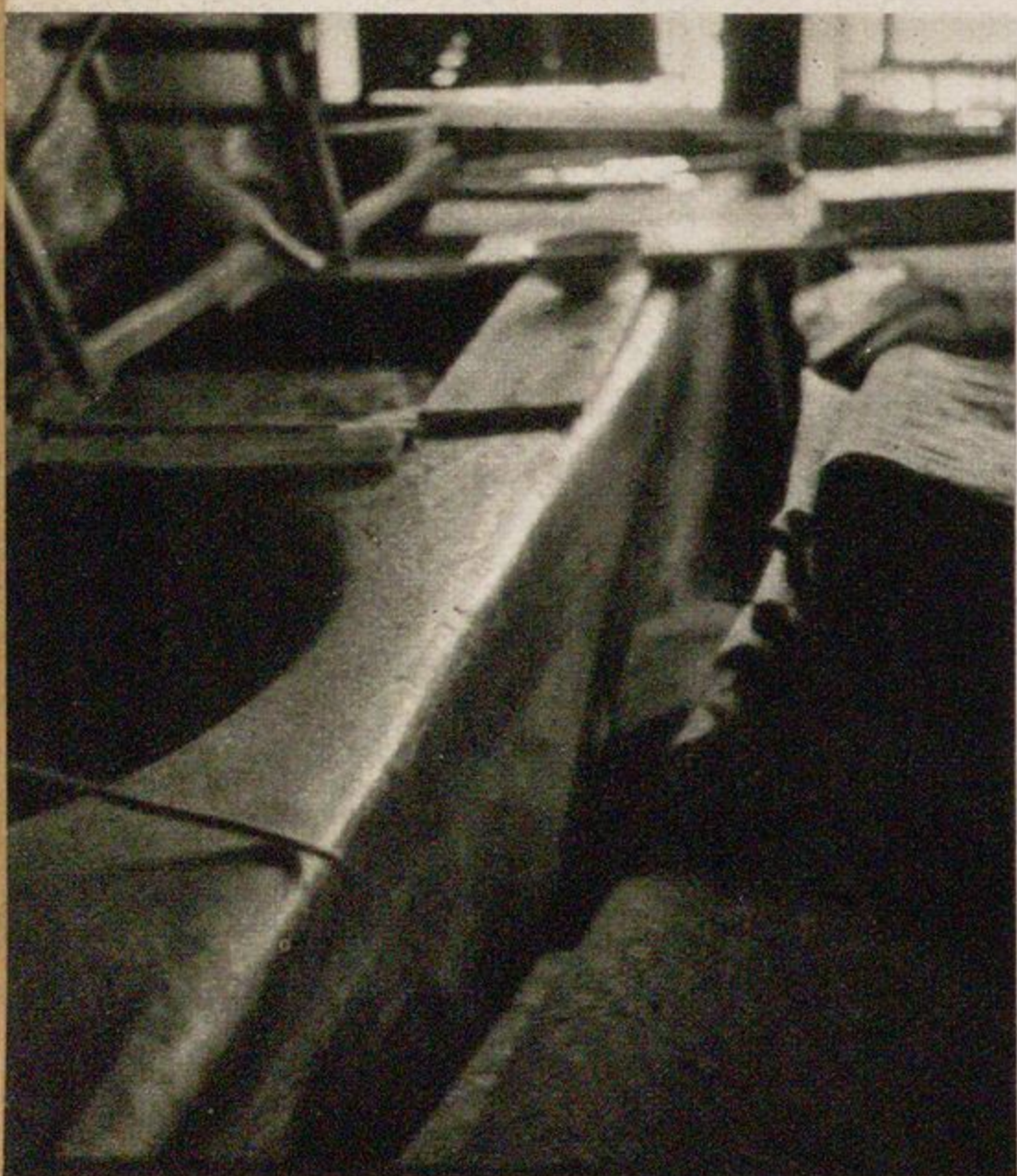
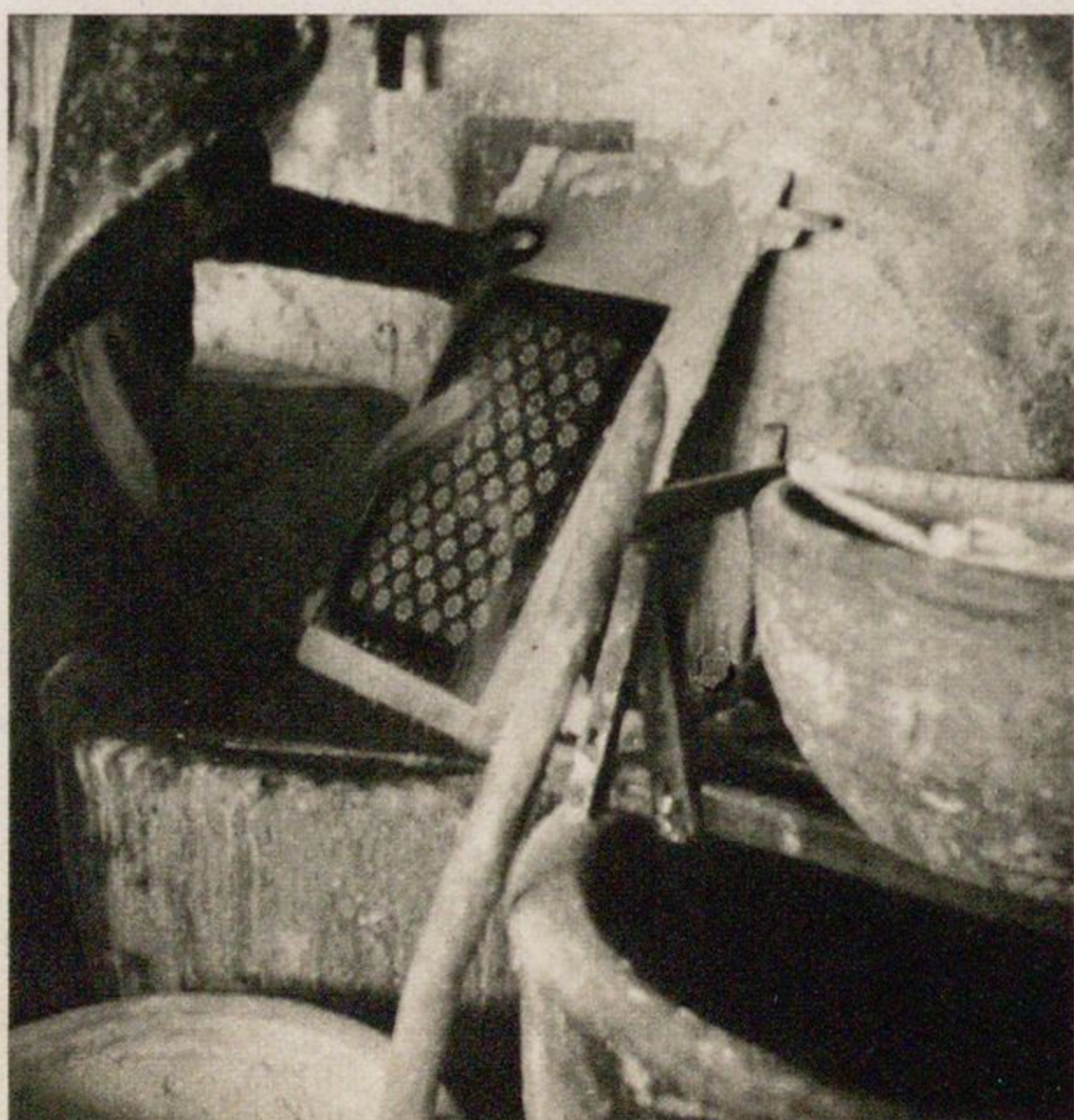
1

5

2

6

3

無敵！國産第一位

ムッソリーニペン

スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！

新生國策イリヂュウム
白金ペン付

クラウン万年筆

書きよく
體裁優美
構造堅牢

流線型

—北京廣安門外天寧寺附近—

大阪・東京・小倉
株式會社 澤井商店

王昭君の故事

石原巖徹

王昭君の墓はもとの歸化城、即ち今の厚和（京包線）の城南二十支里の處に在り、一名を『青塚』と云ふ。

この地方（卽ち謂ゆる塞外）の草は遠望すると白く見えるのに、この墓の草だけはきはだつて青く見えたといふところから、此の名が起つたと傳へられる。勿論これは何かの附會的傳說に由來するものであらう。

王昭君の故事は昔から日本にも傳へられ、絕世の美人の身を政略の犧牲となつて胡國に嫁がせられた薄倖と愛用の琵琶を抱へて馬上雁門關を越えて行くといふ詩的な場面とはいたく我が國人の心琴に觸れたものらしく、歌に繪にいろいろ取りあげられてゐる。勿論本元の支那に於ても同樣に唐宋以來これを取扱つた繪畫詩文は無數にある。

王昭君は漢の元帝の時の後宮の一人で、名は嬙、昭君は字である。後に晋の代になつて晋帝司馬昭と同名の故を以て昭君と呼ぶことを廢し『明妃』と稱することに定められた。もとよりこれは晋朝だけに通用する禁令であるが奇を好む文人達は後世に至つても『漢明妃』と稱することを喜び、王昭君の名を俗だとしてゐる。

支那劇にも『昭君出塞』といふのがあるが、尙小雲（北京の名女形）の演ずるこの劇名は『漢明妃』と稱する。

王昭君が、匈奴の侵入に對する漢室の和睦策の犧牲となつて、匈奴王（單于）に嫁し、薄倖な生涯を終つたといふ略筋だけは一定してゐるが、何故選りに選つてあれ程の才色兼備の麗人をあたら蠻人の手に委ねるに至つたかといふ點に關しては、問題が美人であるだけ、それだけに色々異つた傳說がある。最も普通に行はれてゐる話は次の通りである。

後宮の美女の數が多いので、帝の選擇の便宜のために、畫像を描いて提出することになつたところ、その畫を描く毛延壽と云ふ男が吉良上野みたいな慾深者で、袖の下を使はないと美しく描かない。王昭君は性潔白で、賄賂を使ふことをしなかつた爲に淺野内匠もどきに憎まれて、甚だ不美人に描かれてしまつた。それで帝の選に入らなかつたから、帝には彼女の容色が判らなかつたので、匈奴が漢宮の女をよこせと要求した時、これなら惜くないといふわけで、彼女を出すことにした。

いよいよ出發と云ふ時になつて、いとまごひに來たのを見ると、畫像とは似ても似つかぬ絕世の美人である。これはシマツタと思つたが、旣に匈奴に約束した以上、信を破ることは出來ない。彼女は帝の無情を怨みつつ琵琶を抱へて馬上しほしほ送られて行つた。と云ふので、匈奴の許に行つてから、どんな生活をして、どうして一生を終つたかと云ふ事に就ては傳へられてゐない。ところが別の說によると（中國歷史婦女演義）次の樣になつてゐる。

王昭君は、生れついての美人で、父の王穰のために宮中に入れられたが、帝は彼女の出身が餘り香しくないので近づけることなく五六年を經過した。

その頃、匈奴は南北二國に分裂し、北方の郅支單于は漢軍に滅されて、南方の呼韓邪單于といふのが、漢の女婿となることを條件として和睦を申し入れた。そこで帝は、その申し出でに應ずることとし、後宮の美女達を召し集め

内容

グラフ

よみもの

て匈奴の使者の面前で單于の嫁に行く志願者を募つた。その聲に應じて敢然匈奴行きを申し出たのが、誰あらう王昭君である。驚いた帝が改めて彼女の容姿を注目すると、思ひの外の美人である。惜しいとは思つたが、今更言を誣すわけには行かない。

かくて彼女は匈奴に嫁いだ。後に單于が死んでその子の世達が後を嗣いだ時、彼女は世達に向つて『胡の風習によると、母を妻とするし、漢の風習によると別に娶らねばならぬ。何れを擇ぶか』と問うた。無論世達は彼女の生んだ子ではない。世達は胡の風習に從つて父の妾室を妻にすると答へた。

そこで彼女は漢人としての禮節を守るべく、毒を仰いで自盡した。と云ふのである。

これは正史であると中國歷史演義は記してゐるが、畫像のことや琵琶の話が全然無くて甚だ無味乾燥を極める。

又、別説によると、畫工の毛延壽が賄賂を出さないために、不美人に描いたところまでは前揭と同じであるが、王昭君がそのために不遇を喞ちながら獨り宮中の隅つこの室で琵琶を彈じて慰めてゐるところを、或夜散步してゐた帝に發見され、思ひがけない美人のゐるのに驚いた帝が、わけを問ふと、毛延壽の仕業だといふことが判り、激怒した帝は早速人を遣はして毛を捕へさせようとした。ところが奸物だけに手廻しがよくて、早くもこの事を內報する者があり、危險を感じた彼は、王昭君の眞物の畫像を持つて逃げてしまつた。眞物の畫像といふのは、王昭君自身が鏡を見て描いた自畫像である。

この分の物語によると、彼女は畫に巧みであつて、初め畫像が要ると聞いた時、それならば他人の手を煩はす必要は無いと、自分で描いて毛に差出したものである。毛はナマイキな小娘奴とばかり、それを受け取つて自分の描いた不美人の像とすり換へて、帝のもとに提出したわけである。

さて、理想の美人を得た帝が直ちに彼女を拔擢登用し、日夜寵愛これ勤めたことは云ふまでもないが、一方、逃げた毛延壽は漢の國內は危いとみて、匈奴の陣營に奔つた。投降の引出物は王昭君の畫像である。さうして單于に向つて『王昭君を嫁に貰れなければ、漢の天下を滅ぼす』と云つて使ひを遣ることを勸めた。と云ふのが王昭君匈奴行きの由來であると云ふ說である。

この方の話は更に複雜で、帝と王昭君とは旣に恩愛の契り淺からぬ間柄であるから、如何に漢室保全のためとは云へ、別離の情は双方共に極めて切なるものがあり、悲劇としては申し分が無い。

又別の傳奇小說「昭君和番」によると、毛延壽は畫工でなく、時の宰相になつてゐる。

畫像は王昭君自筆のものを用びてただそれの顏にホクロを描き添へて、缺點のある美人といふことにしてある。その他の經過は前說と同樣であるが、彼女が匈奴に嫁いでから、色仕掛けで單于を手玉にとり、毛延壽を單于の手で殺させて仇を報ずることにして、大衆の人心を快にし、而も種々の手を用ひて常に單于の慾求を巧みに外づし、貞操を守り通して、最後は孟姜女もどきに河に投身して自殺してしまふと云ふ筋になつてゐる。

この方は恐らく極く近世になつてから造られた小說と思はれ、傳說としては筋が通り過ぎてゐる。

要するに王昭君の故事は、漢代に於ける北方異民族匈奴の中原侵入が如何に猛烈であつたかと云ふことと、それを防ぐための謂ゆる和番政策に、宮室關係の婦人が利用されたといふこと、從つてそれがために種々の悲話哀話を生んだと云ふことに對する後人の、一**種の批判と見ることが出來る。**

これは恰も、萬里長城築造に於ける幾多人民の犧牲に依つて生れた悲話哀話に對する後人の批判として孟姜女の傳說があるのと軌を一にしてゐる。

明の江陰士子の昭君圖に題する詩に

驪山の擧火は褒似に因り
蜀道の蒙塵は太眞の爲なり
能く明妃をして胡虜に嫁せしめたる
畫工應さに是れ漢の忠臣

（註、褒似は周の幽王の寵姫で、驪山は有事の際に烽火を擧げ、諸侯の救援を求める處。幽王は褒似の笑を買ふために惡戯に烽火を擧げて諸侯を嘲弄した結果、後日犬戎來襲の際に、眞實の烽火が用をなさず、身を滅すに至つた。太眞は楊貴妃のこと）

これは幽王、玄宗などが、美姬のために身を滅したことに比べれば、王昭君を匈奴に與へることに依つて君國を安泰ならしむべく仕向けた畫工は應に忠臣と云ふべきであると云ふ一種の皮肉と思はれるが、この當時（明）に於ては毛延壽が賄賂を出さぬために不美人に描いたと云ふことが通說であつたものと解せられる。

これを更に皮肉に云ふならば、賄賂を重視する觀念が漢室を救つたのだと云へないこともない。然し物語や小說で毛延壽を敵役に取扱つてゐるところを見ると、賄賂は支那に於ても正義に反するものとなつてゐるに違ひない。

（筆者は華北交通資業局參與）

第一書房戰時體制版 各七十八錢

弓館芳夫譯

三國志

初刷三萬部出來

時は今から千七百五十餘年前、所は戰亂の支那大陸。登場人物は千餘名に及ぶ!!英雄互ひに會して到る處に相爭ふ三國時代!!大衆文學など足許にも及ばない面白さ!!

弱肉强食の世界であつた支那三國時代、言語に絶する戰ひの歴史!!『三國志』は變轉興亡せる當代の史實を豐富な創作的幻想によつて肉付けした稗史小說の王様である劉備・關羽・張飛・董卓・操曹・孔明・趙雲・孫權・周瑜・司馬懿などの御馴染の英傑が次から次へ走馬燈のやうに登場しては劍戟の響きを起す虚々實々の波瀾萬丈!!この書出でて五百年、支那大衆に愛讀された世界的名小說、『西遊記』や『水滸傳』よりも長い大冊を可能な限り原著の面影を移して縮した苦心の譯述である。

伊藤康安著

佛敎人生論

初刷二萬部發賣

永遠の聖者親鸞は、同時にまた民衆にとつても親しき人てある。本書は人間としての親鸞の全貌を描いて、その精神的内面を展開す!!まことに聖者とは白眼一世を睥睨するものでなくて、世を荷つて渡る人てある。

山邊習學著

わが親鸞 近刊

本書は彼の一生を史實に即して述べるだけにとどまらず、彼の心の動きをも捉へて、事實と内部を聯關させて說いたものである。今までの聖者の概念を新しくして人間親鸞の偉大さを明らかにする。

東京市麴町區三番町 振替東京六四二二三

北支と淡水魚の養殖

奥野忠雄

北支は一帶に水が少なく、水があつても汚なくて、魚類養殖の可能性は殆ど無いのではないかと云ふ風に聞き及んでゐたが、最近北支蒙疆の鐵道沿線を視察してみて、決して悲觀すべきでないことを知つた。

實に立派な水源もあり、清冽な流れや湖沼もあり、又運河など廣大な水域も決して魚類の棲息に不適當であるとも思へなかつた。而もこれ等の水が今日まで餘りにも利用されてゐなかつたことにむしろ驚かされた程である。

内水面の利用に就ては、日本内地では既に古くから行はれてゐることであるので、先づ内地に於ける今日までの經緯、利用方法を述べ、北支に於ける調査の一般を報告することとしよう。

琵琶湖の養殖事業

内地に於ける淡水魚養殖事業は、琵琶湖を擁する關係上滋賀縣が最も盛んであり、且つ古くから行はれてゐる。特に養殖狀況をみると現在放流を行つてゐるものは鯉六百萬尾、鱒五百萬尾、鰻百萬尾、鮎二億卵粒、公魚一千萬卵粒をはじめ約六十種の淡水魚を數へることが出來、これに依つて年產二百萬圓の漁獲をあげてゐる。

淡水魚を大別して溫水性と冷水性に分類することが出來るが、溫水性は水溫十五度以上で生長するものとし、鯉鰻、鮒、ハエ等が之に屬し、冷水性の方は二十度以下で生長するものを云ひ鱒、鮭、鮎、公魚の類であるが、鮎と公魚は二十五度までは差支へない。

冷水性と、溫水性との區別は、背部の背鰭と尾との中間にある鰭樣のもの（これには骨は無い）で、これは冷水性魚に限つて存在するものである。

放流作業は夏には溫水性、多及び早春には冷水性のものを行ふやうにしてゐるのである。

鯉は彥根城の濠で孵化させて放流してゐるのであるが、稻田に五六月頃稚魚を放流農家にも中間飼育によつて利益を與へるやうに努めて居り、鰻は人工的には增殖不可能なので、川を遡上して來る稚魚を捕へて放流してゐる。

琵琶湖在來の鮎は從來小鮎と云はれ成長しても二三寸にしかならず、普通の鮎とは別種のものと考へられて來たが、大正十三年に到つて、この成長減は全く後天的のもので普通の鮎と全く同種のものであることが分明した。

北支に於ける鮎の放流事業も大いに考慮されてよく、石門から太原に行く途中の娘子關あたりの川などは至極好適であると思ふ。

上圖 カハマス（河鱒）
下圖 ニジマス（虹鱒）

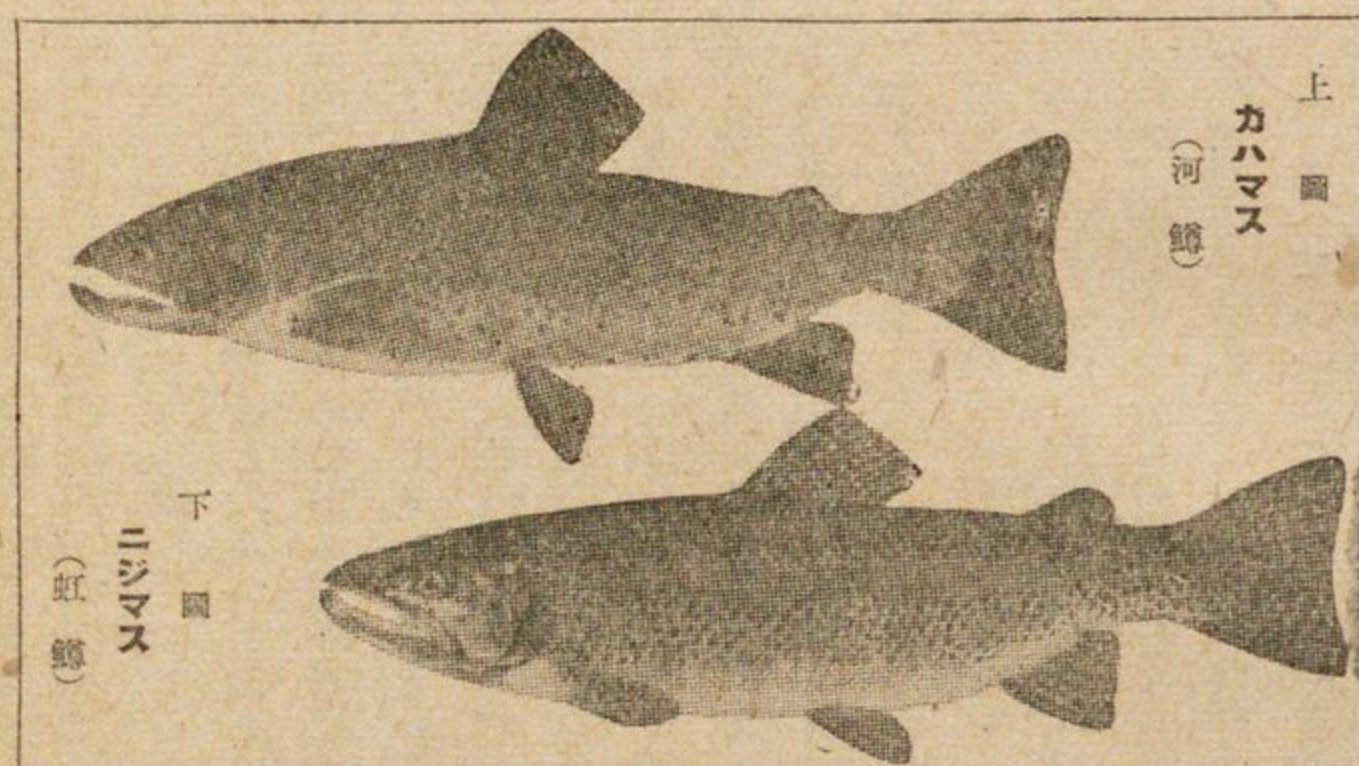
鮎は大體、川で大きくなり、川から海へ注ぐ砂利のある處で產卵し、孵つたものは海で越冬、四月頃川に遡り、九十月頃、又川を下つて產卵し死亡するもので、一年きりで死ぬので別名を年魚とも云つてゐる。

琵琶湖では一千萬卵粒程度を採卵し人工受精して川で孵化したものが琵琶湖に入つて來るやうにしてある。

公魚も附着卵で、人工孵化であるがこれは昨年濟南に持つて來て放流し、かなりな成績を擧げてゐる。

鱒は元來琵琶湖にゐたもので、十一月頃產卵のために川に遡るものを採卵し、これを孵化場に移して孵化させた上、放流してゐるが琵琶湖在來種は琵琶鱒とか雨魚とか云つてゐる。

尙この養殖數維持のため、醒井に於て昭和二年から親魚養成事業をはじめ從來不可能視されてゐた鱒の池水孵化に成功するに到つた。鱒の孵化には水溫が二十度以下、清冽、水量豐富、土地に勾配のあること、更に又交通の便と云つた各種の條件を必要とするが、醒井の地は有名な醒井峽谷であり、湧水あり、湧水點では水溫十二度の冷清水であつて凡ての條件に適ひ、下流十五六町を養殖に利用してゐる。

又、現在米國種の虹鱒と河鱒を養殖

孵化させ、毎年五百萬尾を琵琶湖に放流して來たが、昭和八年頃から順調になり、八百萬粒の卵が採れるやうになつた。今では琵琶湖に放流する以外に山村や農家にも稚魚を與へ、民間では三十坪か五十坪位の池を利用して相當の成績を擧げて來てゐる。

北支の養殖事業

北支を一瞥して、その養殖適地の多いことを痛感すると共に養殖に關する諸般の研究の緊急なことも痛切に感じたのである。先づ北京に就て云へば、南苑苗圃があり、圃場一隅に十五度位の清水が流れてゐるが、あの流水を利用することによつて十五萬尾位の鱒を生産し得るであらう。飼料も海老類やガムマルス、ミヂンコ等豐富であり、水は綺麗とは云へないにしてもあれで結構である。萬封山や玉泉山あたりの水も鱒には好適であり、又中央公園やその他の公園の池は溫水性の鯉、鮒などで利用出來ると思ふ。

天津附近では北寧公園の水が養鯉に適し、多少の整備を加へ、養殖、釣堀等に利用すれば福祉方面に資することが多いであらう。

又郊外大任莊附近には煉瓦工場に於て煉土に利用された大きな池が多數あり、これは養魚池に恰好な長方形の三四千坪の池になつてをり、この池水面積大凡六百町歩あると云ふが、これを全部利用出來るとすれば、五十萬貫以上の鯉が飼へるし、又運河や水路も鯉や公魚の養殖が出來ると考へられる。餌料として好適なプランクトンも多いのでこれ等水面を放置するのは全く惜しい氣がする。

濟南の方も水が豐富で而も湧水もあるので鱒の養殖には最も適してゐると思はれるのに、あの綺麗な水を持ちながら湧水點に於て洗濯などして水を汚してゐるのは如何にも殘念である。これは宜しく養魚に利用して然る後に洗濯してこそ結構であらうし、養魚を行へば實に何十萬尾もの鱒が飼育出來る筈である。ただ難點を云へば流れに落差のないことで、池を作るのに不便であらう。濟南に於ては現在山東省公署が醒井鱒の移植を行ひ、相當成績は擧げてゐるやうである。

次に石太線娘子關であるが、ここも亦驚くほど水の多い所で、現在何等利用されてゐないことは誠に遺憾で、殊にその附近の溪谷（鯉登の瀧）は水が清澄で勾配もあり、鮎の養殖の外に水力發電も考慮して可能と思はれる。

太原近郊の晉祠鎭部落の廟に湧水があり、溫度は十八度位、勾配もあり水も綺麗なので鱒の養殖に適してをり、池も作り易い。現在水田に利用してゐるが、水が冷たすぎると云ふから養魚池に利用して水を溫めてから田に利用するといいと思ふ。長野縣から鯉をいれてゐるといふがそれは無理である。

次に蒙疆地區に就て觀るに沙嶺子の水は調査時濁つて居たが、これは田を作る間だけと云ふ。水溫は十二、三度だから、水を濁らすこと（田を作る間の）に對し又濁水に對する研究が必要で、それにより養鱒の適不適を云ふべきであらう。尙、その附近に川が流れてゐるが、慰安の少いその地方に對し川に魚を養ひ、釣場を設けるといつたことも、考へていいことではなからうか。

下花園站附近にも三千坪位の大きな池があり、湧水してをり溫度は十一度位、綺麗な水ではあるが水量尠く釣場位に利用する外はない樣である。

以上、大體北支をみて全般的に豐富な湧水があり、又大きな湖水、運河など相當に廣い水面が遊んでゐる現狀は食糧資源確保の見地からみても遺憾なことで、これ等內水面の利用こそ、緊急の要務であらうと痛感する次第である。

（筆者は滋賀縣醒井養鱒場長）

紅軍長征夜話

小山内　匠

『紅軍』とは云ふまでもなく『國民革命軍第十八集團軍』の前身で、名こそ變れど今も昔も變らない中國共產黨軍です。然し、共產黨員や黨軍兵士たちは八路軍とか、第十八集團軍とかは云はないで、紅軍紅軍と口にするのが一つの習はしとなつてゐる。それは單に文字上から來る詩的さや音感上から來る魅惑などといつた甘さ加減からではなく、實に紅軍といつた時代の苦難の歷史に戰場の喜怒哀樂はもとより、自己を中心とした樣々な人生斷面、卽ち激動の生活が織り込まれ、而も同志に共通な思ひ出があるからです。

『紅軍』それは彼等にとり、一つの勝利であり、誇りであり、又慰めの表現でもあるのです。

併し今日では、八路軍も恐ろしい兵員に達したので、誰も彼も紅軍ではなく、むしろ八路と云つた方が既に適切だと云つた新參者も多く、差し當つて山東省に於ては山東縱隊と一一五師とがあり、前者は事變と同時に靑島及びその背後地の工場、學校、軍隊等に入つてゐた共產黨員が舊東北軍の赤化分子と共に蜂起し、共產軍を編成したのだから紅軍としての歷史は皆目ない。

これに對し、後者は紅軍中での最古の紅軍ゆゑに仲々どうして一通りの風當りではすまぬが道理、とかく此の兩者は肌が合はず、軍政兩面の敏腕は紅軍きつての蘇魯皖邊區總司令徐向前も至極頭を惱まし、改編に次ぐ改編を行つてゐる程です。

然るに一一五師は自ら『老』の字を冠して、自己の部隊を呼稱し、『老一團』といふ風に邊區の百姓たちに敎へ込み、山東縱隊の方は單に『一團』乃至は『新一團』といふが如く差別し、紅軍を誇示して讓らぬといふから滑稽であります。

さて、其の紅軍史にはどんな輝しい過去があるか？　と云へば、無論一九三四年十月、福建省に程近い江西省瑞金を出發して、西安事件直前に陝北に辿りつくまでの長征二萬五千里と、その間の歷戰物語がそれなのです。

殊に長征軍の中でも現一一五師は遠征當時、第一方面紅軍であつて、長征の先驅をなし、それだけに他の紅軍より多大の無駄足も踏んでゐるわけだ。

長征紅軍は湖南省より貴州省の省府貴陽を襲ひ、入城三日にして剿共軍に叩き出され、四川、湖南、湖北の省境を窺つたがここでも蔣介石の追討が手嚴しくなつてゐたたまれず、遂に北上して甘肅省に入り、毛澤東軍の如きは陝、甘、寧省境の環縣、合水に、他の紅軍は寧夏省に突入して豫旺、甘泉へと途方もなく長征してしまつた。しかし、一九三六年春、甘肅省內で大合同を遂げた長征軍の領袖、毛澤東、徐海東、朱德、徐向前、賀龍、肅克らは多年の希望を達して西北に盤據し始め、次の大東漸の機を待つた。

何しろ優秀な剿共軍と戰ひ、離合集散の果、西北に集結なし得たのだから紅軍としては大成功であり兵士の感慨や又無量であつたことでせう。

長征二萬五千里——支那の廣さもさりながら、紅軍の健脚も大したものであり、戰野を跋渉すること正に三年、木綿の戎衣は破れ、靴は裂け、頰はすり落ち、宛ら野性の狼群の如き長征の英雄たちであつたことも、さこそと思はれる次第です。

この長征紅軍が、現に北支建設の當面の敵たる八路軍の基幹をなしてゐるのですから、遊擊戰と稱して逃げ廻ることの巧さ、足の速さは當然で、確かに『三十六計逃げるに如かず』の兵法を生んだ國だけの貫祿はあるやうです。

さて、紅軍は陝北に落着くかに見えたが一九三六年の春、謂ゆる紅軍東漸の第一步を踏み出した。同時に剿共軍の大將、張學良の間拔けさ加減を巧みに利用して、同年十二月十二日『正に我が敵は本能寺にあり』とばかり、剿匪の鋒十ケ師を以て、西安を距る三十哩の溫泉鄕、華淸池に遊ぶ蔣介石を急襲、蔣の親衞隊五十を全滅して西安に拉致監禁し、紅軍は蔣から年額五百萬元の軍資金を支給する契約に爪印を捺させて妥協するなど、學良を手先に一と仕事に成功しました。

かくして件の紅軍は明けて支那事變の年には、綏遠に或は山西に西安にとなだれ込み、漸く紅軍隆盛の端緒を摑んでゐました。そこへ彼等が思ふ壺の事變勃發となつたから、果然重慶への物言ひが激しくなつたこと無論です。

それはさて置き、紅軍の第三次長征はそれからのことで、ここに登場する一一五師師長陳光は第三次長征でのト

ツプを切り、山西省潞安から東進また東進して山東省黄縣の山寨、青駝寺に達した韋駄天將軍です。その彼は長征三萬里と稱して逃げ廻つた過去に氣付かず、無精に長征を嬉しがり暇ある毎に手柄話の花を咲かせるのです。とまれ、彼が此の自慢もあながち誇張でない證據には、陳光は一九二七年彼の郷里江西省で紅軍が始めて成立した時、一兵隊として加はつたのだからその時より數へて十五年、紅軍での最古參組長征のレコード・ホルダーたることに相違なく、本年三十六歳と云ふから彼の紅軍參加は二十歳といふことになります。つまり彼陳光の人格其の他一切は、長征間に出來上つたといふも過言ではなく、その彼は一見コツクにも見違へられさうな破れズボンに穴のあいた軍帽を冠り、一向に無頓着で年がら年中がなり立ててゐます。特に戰ひとなると眼をギラギラさせ腕をまくつて部下を片ッ端から罵り飛ばすと云ふのですから、流石長征で鍛へた野性指揮官の面目躍如たるものがあります。

と云つて平素の彼は極めて無邪氣なもので、朝早くから起きて兵達と一緒に馳け足にも參加し、將棋もやり、一寸紅軍での『ノンキなトウサン』と云つた處でせう。以下紅軍長征後日譚として暫く彼の話を聞くことにします。

ワシは兵から叩き上げて事變の年には師長に達してゐた。何しろ學校も碌に出ず、讀書も嫌ひなのでワシはマルクス主義が第一の苦手だ。しかし紅軍の眞髓は摑んでゐる。幾らぼんくらでも『朱に交はれば赤くなる』と云ふからな。ワシの一つのヒケ目は文明開化のことぢや。それでよく恥をかかされる、いつぞやこんなことがあつた。

長征の苦勞も碌に知らぬ學校出の若い部下は此のワシを困らすにはチト智惠があり過ると見え、丁度潞安に居た頃、サイダと云ふものを持つて來よつた。美味しいから飲めといふので口を拔くや大變な泡を吹くぢやないか、俺はこれはテツキリ日本軍が毒を盛つたに違ひないと思ひ込み、部下を叱りつけたことがある、全く我ながら恥しい話だ。それからまだ惱まされることは訓示ぢや。ワシが人一倍大きな聲で讀み違へるのを黨の奴らはチヤンと心得て、それを文中に仕組んでゐるから耐らんよ。こんなのがあつた。

磊落をシ(石)落、迷惑を迷ガン(感)、追悼を追ディヤオ(掉)と讀み違へて大笑ひされた。長征三萬里の將領もこれには勝てんテ。

長征と家族の關係か、そりや無理ぢや、紅軍では鬪爭の歷史の長い者でないと結婚出來ぬ不文律がある。現に旅長で妻を持つてる者は殆んどあるまい皆獨身ぢや。……だから紅軍の部落進入が極度に婦女子に恐れられてゐるつて、キミ話は其處までいつては味がなくなるよ。それは兎も角この一一五師（現在は山東縱隊も編成に入る）で、妻帶してゐるのはワシに政治部委員の羅榮桓、政治部主任肅華、それに供給部長の四名きりだ。

ワシの女房は史瑞芳といつて二十二歳、山西省沁源の者で、太原の川至醫學校を出てゐるので紅軍の軍服を着せて軍醫にさせてゐる。供給部長の女房とは同縣同校出身で、民國二十七年の多ワシらの處に嫁入つて來た。

羅の女房は林月琴といひ、組織部幹部科科長をしてゐる。又肅の女房は王馨蘭といひ無電の記錄係をしてゐる。今年二十歳で餘り別嬪でもないが浮氣者なのでワシも少し手を燒いてゐる。紅軍部內のことなら上は毛澤東、周恩來のことから何でも知つてゐるが、此の邊でそれは打切り、潞安以後の東進について一二物語らう。

事變直後の九月、紅軍は共產旗を押し立て革命歌を山岳にこだまさせつつ長城線へ東進し、九月二十四日山西平刑關で戰ひ、十月下旬、朱德麾下共產一ケ師は娘子關に陣し鯉登、小林部隊と激戰を交へたが破れ、ワシは遼縣まで下つて戰つた。その翌年師長林彪が延安にある抗日軍政大學校長となつたのでワシが後任し、東進して魯西地區に入つた。

この間、日本軍と戰つて一番手强はかつたのは、忘れもせぬ民國二十八年五月十一日の陲房戰鬪（東平肥城縣境）だ。この時は司令旗はとられる、司令部はやられるで、ワシも女房を殺し自殺をまで覺悟したが、今一歩といふキハどい處で助かつた。ワシは長征三萬里の間、こんな敗け戰は味つたことがなく、政治委員の羅がワシを責めるので喧嘩してやけ寢を五日もしたよ。

以來、日本軍との戰ひは精悍無比で通つた流石のワシも自信をなくした。

なにしろ北支轉戰以來、身に負ふ傷十一箇所、中一彈は右眼をかすめた、これ此の通り少し目つかちになつた。思へば事變前、蔣介石とよく戰つたが彼らは掛聲ばつかりだつたな。

最後に、紅軍よ何處へ行く……だ。まアそれに就ては今も話した通りの有樣だから、諺の如く敗軍の將は兵を談ぜずといふことにしよう。

（筆者は共派八路研究家）

華北勞工協會とは

小松健三郎

北支の傳統的な特性に、苦力勞働群があつた。嘗ての兵匪の慘禍、生活の窮迫、或は天災地變の影響を蒙むる毎に彼等は滿洲の地を求めて流浪した。

そのはじめの頃は、南滿地帶であつたが、段々北滿地帶へも進入して行つた。これは政治的な要因や、經濟的な問題にもよるが、その數は實に年平均六十萬に及び、最高時は實に百四十萬を算へる年度もあつた程である。

昭和十年は、滿洲國自體の問題から入滿苦力を制限したこともあつたが、何れにしても彼等の勞力は建設面への協力であつたことは否めない。

卽ち滿洲國に於ける産業五箇年計畫や北邊振興工作など矢繼早やに各種の事業がすすめられ、躍進一路をたどつて來たと共に、從來の炭坑勞働、農業林業……この建設一路の推進原動力は勞働力であり、これは卽ち勞働苦力であると云ふことが出來るであらう。

併し、今次の事變は凡ゆる意味に於て東亞共榮圏内の一大轉換期であり、苦力の鄕土北支に於ても戰禍による疲弊と農村機構の根本的破壞により、農民は生活のドン底に叩き落された。

嘗ての時代ならば、彼等は易々として樂土滿洲の地をさして入滿苦力の名稱に甘んじたが、今では少くともこれを阻む三つの要素が發生してゐるのである。

その一は、治安の良否である。占領地區と匪區地區との錯綜は治安に重大な影響を與へることである。

その二には、共産八路の妨害がある。工作と宣傳と、謀略と技術で無智な大衆に呼びかけねばならない。而して

その三は、北支の相貌が一變したことである。軍、新民會、及び華北交通の懸命な努力が結實して、占領地區に於ける諸工作が着々と進展し、この建設には苦力を要求し、民衆の協力を必要とするからである。

殊に新民會では、ささやか乍ら勞工科を新設し、廢屋の一角にその運轉を開始したが、尙全面的に意を注いだりエキスパートを網羅することは困難であつたと云はねばならない。

一歩進めて云へば北支の勞働力に對しては、その調整と合理的な配分が必要なのである。そして一方執拗なゲリラ戰を展開する共産八路にも備へなければならない。そして如何にして勞働力を確保するかと云ふことである。

もう從來の自然條件にのみ俟つことは許されなくなつた。積極的な人爲工作と意圖がない限り前進の途はないのである。

ここに産聲を擧げたのが、華北勞工協會であり十一月一日を期して希望ある新發足をはじめたのであるが、尙ほ前途多難は覺悟しなければならないとしても、そのあらゆる障害を乘り越えて進まなければならない。又關係者の苦心も並大抵ではあるまいが、何にしても飛躍の一階段を劃したことは事實である。今、明日への建設を祝しながら着々築き上げてゆく行動の一二を斷片的に拾ひあげてみよう。

＊

昭和十六年の冬、蒙疆地方は一千名の苦力を必要とした。早急な要求ではあつたが、新民會では寢食を忘れて奔走し、僅々半箇月にして山東、河北の各地から要求員數を集めて來た。

かくして邦人ならば屠蘇の香に醉ふ正月、一千の苦力は默々として八達嶺の嶮にかかつたのであるが、折柄の吹雪と凍てつく大地に言語に絶する難行を續けたのである。そして漸く懷來に工策本部を作つたのだが食糧飢饉と急患の續出に全く行動の自由を失つてしまつた。

悲痛なるS・O・Sは新民會勞工科に舞ひ込んで來る。施す術を失つた引卒者は萬策盡きて徒に長歎息するばかりであつた。

このS・O・Sに應じて立つたのが袴田科長（現華北總務科長）と高田（現華工協會）の兩氏であつた。

古戰場の嶮を越えて、幾度か轉びつつ馳けて行つた。食糧とアンペラと：：袴田氏は齒を喰ひしばつた。醫術の心得ある高田氏は夥しい凍傷の群を見舞つた。

赭い夕陽の沈む山の端からは、豆を煎る樣に銃聲が起つた。この籠城の十數日、尊い二人の日本人の姿は流石の苦力達の胸底にヒシヒシ感じさせるものがあつた。これでは我々が死んでも文句はない。淚する彼等の前に兩氏も感嬉にふるへてゐた。

民衆と共に――この觀念が生死を超越して勞工工作への力强い第一歩を踏み出したのである。

*

炭坑と苦力と共匪――これだけでも充分貴重な文獻を構成するであらう。

柳泉炭坑は、當時中央軍系の范匪軍に包圍されてゐた。彼等は御他聞にもれず暴虐の限りを盡してゐたが、日本憲兵隊では范の叔父なる劉を捕縛して連日嚴重な取調べを行つた。

やがて劉の死罪が決定した日、突然その命乞ひに出て來たのは、意外にも柳泉炭坑長の齋藤氏であつた。彼は若人らしい情熱と鐵の様な意志を持つた若冠二十四歳の青年であつたが、自分が一身を投げうつてでも劉を改心、歸順させてみせるから、身柄を引渡して貰ひたいと云ふのである。

その大膽で卒直な言葉、熱意にあふれた意氣を諒として、その申し出通り劉は齋藤青年に預けられることになつた。釋放された日、劉は泣いて感謝した。そして范も必ず歸順させますと約束して早速范を說得に出かけた。

併し疑心暗鬼の范は

『一度、齋藤個人と二人で對談したい』

と云ふのであつた。

そこで齋藤青年は、敵の重圍と拳銃の波を冷然と眺めながら單身范と對面し容共の非を諭し反日の愚を訓へた。

この大膽とその意氣は功を奏した。

范も人の子である。叔父劉の生命の親である齋藤氏の誠意に感じ、遂に前非を悔ひ、今後の協力を誓つた。

今では炭坑に反く敵匪なく、むしろ外敵に對しては防禦陣となつてゐる。

*

『苦力の募集のために各地の實體調査が行はれてゐるのですが、並大抵の苦心ではありませんよ』と華工の杉山氏は語るのである。

焦作炭坑を去る五百米東北に李風村と云ふのがある。人呼んで灰色部落。事實それは暗黑街であり、共匪の群は放火、掠奪をひつきりなく行つた。

戸數六三一、人口五千四百三十四のこの部落には生活の安定など藥にしたくも無かつたのである。

杉山氏達が最初この部落に入つた夜は、建物に石油罐がばら撒かれ、共匪の手によつて放火されたのだが、炎々と燃えさかる焔の前に父を失ひ子を失つた農民達の悲慘な姿が右往左往して阿鼻叫喚慄然たるものであつた。

その翌日から調査が開始されたのであるが、炭坑には不良分子が網を張りちよつとした情報も筒抜けに通じて逆手を打つて來る。

例へば彼等が手掘の石炭を噸當り四圓だと云へば七圓の買上げ値段をつけてくる。實際は不拂ひなのであるが、民衆は一應彼等の宣傳に躍らされるのである。

或る夜のこと並木道を調査班の人達が通つてゐると、可憐な姑娘が走り寄つて來て『私は日本のスパイではありません』と泣いて哀願する。或は頭をかきむしつて祕密の紙片など隱してはゐないと訴へたり、衣服を脫いでは調べて呉れと云ふのである。

これは一行を共產八路だと誤つての行爲であるが、これを以てしても如何に共產八路の嚴重な身體檢査におびえてゐるかが判るではないか？

調査が濟んで對策が建てられ、討伐が行はれた結果、この灰色部落も今では興亞小學が新設され、二百八十名の學童が嬉々として通學してゐる。

農民は嬉んで炭坑の坑夫を志願して出る狀態である。

新民會の役割も又大きいものであり華北勞工協會の積極性も、ここに始めて意義を持つものであると信ずるものである。

（筆者は新民會囑託）

冬至祀天の禮

石橋丑雄

北京の天壇に於て擧行せられた祭祀には、毎年の冬至に行はれた祀天の禮それから雨を祈つた雩禮、國家の大事を報告した祇告の禮、五穀の豐穰を祈つた祈穀の禮等があつたが、此等の中で祀天、雩禮、祇告の三祀典は、圜丘に於て行はれ、祈穀の祀典は祈年殿に於て行はれる定めであつた。

此等の中でも最も重要なのは祀天の典禮で、卽ち天命を受けて四民に君臨する天子としては、大祀の第一位に置かれた祭祀である。

この祀天の典禮は冬至の早晨を以て取り行はれることになつてゐて、其の時刻は日出前七刻の定めであつたからこれは夜明前の一時間半頃に始まるのであるが、かうして特に冬至の日の未明時が選ばれたる所以は、此の日が一年を通じて滿ち滿ちた陰の氣が其の極に達して、漸く陽の氣に移りはじめる時に當るといふところから、この陽の氣の兆す時を以て天を祭るためで、陰の地と相對する陽の天を祭る意味に因つたものである。

かうして祭られた天なるものの本體は、時代に依つても幾度かの變遷があつたもので、すなはち近い例に見ても、明から清初に亘つては昊天上帝の名を以て祭られてゐたものが、乾隆の初年これを皇天上帝の名に改められ、更に頃に降つて民國三年に、袁世凱がこれを祭つた時には、上天の名を用ひてゐる。

斯の如く或は昊天と稱し、或はまた皇天、上天等と稱せられるのは、要するに天に對する觀察の相違から來る名稱で、これに就ては色々と議論も存するけれども、昊天の名は卽ち廣大なる天の意味であつて、其の德や其の大さの廣大無限なるを意味してこれを稱へたものであり、また皇天の名は天を以て宇宙の君主としての尊稱であり、それから上天の名は形體的に上を覆ふ天であると共に上に在つて下に君臨する天として稱へたものであるが、かうした理想神を以て宇宙の最高最大の神となし、これを天の主體として天子命を受くるの本源と考へ、歷朝の天子は帝城の南郊に特に壇を築いてその神位を設け、親ら北面して臣禮を執つてこれを祭るのを古來の通禮としたが、この天を敬ひ天を畏れる思想こそは、昔から支那の政敎や道德の根源をなし來つたもので、またこの天を祭ることが、民國以前に於ては、四百餘州に君臨する天子の特權とも見るべきものであつた。

天壇では、かうした天の上帝を主位としてこれを正位の神座に祭つたのであつたが、この外にも配位・從位の神座があつて、これ等は祭祀の種類によつて其の排設を異にするのみならず、各神座の陳設や供奠も祭祀の種類や祭神の神格によつて頗る不同があつたから、祭祀の內容には相當複雜に亘る點も存したもののやうである。

今、光緒大淸會典の所定によつて冬至祀天の神座を見ると、圜丘上壇の中央には稍後方に偏して、南面の正位に皇天上帝の神座が設けられて、此の中に神位を安置し、これに配してその前方東西には、天子の祖宗の神座を設けて東の神座には太祖、世祖、世宗、仁宗の神位を置き、西の神座には太宗、世宗、聖祖、高宗、宣宗の神位が置かれて、これ等の正位・配位に對して中壇の東方には太明（日）と星辰（北斗七星、五星、二十八宿、周天星辰）の兩神座を設け、西方には夜明（月）と雲雨風雷四神との兩神座を設けて、これ等を從位と稱したのであつたが、茲に注意すべきは、諸壇の祭祀は露祭である關係上、此處でも各神座はこれを幄を以て覆ふ程度に止めた事と、諸神位を椅子の上に安置してその前に供桌を設け、各種の供へ物を列べ、次に俎を置いて牲を供へるやうになつてゐたことと、正位の皇天上帝の前には特に玉の璧が奠せられた事、正位と配位と蒼の俎には特に犢が供へられ、從位の太明と夜明との俎には牛が供へられて、諸星及び雲雨風雷四神の俎には、普通の太牢の例に據つて牛、羊、豚が供へられた事等であるが、かうして玉を奠するのは、天、地、日、月及び社稷の祭祀に限られた特例で、また俎に犢を用ふるのは天地兩壇の正位と配位とに限られ、牛のみを用ふるのも、この從位に於てのみ見る特例であつたやうである。

神前供桌上の供へ物はこれを陳設と稱してゐたが、これは正位には三十二種、配位には三十一種、從位の太明・夜明には二十七種、諸星及び雲雨風雷の四神には二十九種の定めであつた。

（筆者は北京市公署觀光科專員）

いま試みに正位の供桌に就てみると神座の前面中央部には爵（酒）登（太羹）、簠（黍、稷）、簋（稻、粱）、篚（玉、帛）が供へられ、その向つて右側に十二の籩が設けられて、形鹽、鱐魚（ウミエビ）、棗、栗、榛、菱、芡（オニバス）、鹿脯（鹿の乾肉）、白餠、黑餠、糗餌（イリゴメ）、粉餈（コナムシモチ）を盛り、また向つて左側には十二の豆が設けられて、韮菹（ニラノツケモノ）、醓醢（肉醬）、菁菹（カブラナノツケモノ）、鹿醢（鹿の肉のシホカラ）、芹菹（セリノツケモノ）、兎醢（兎の肉のシホカラ）、筍菹（筍のツケモノ）、魚醢（魚のシホカラ）、脾析（牛の胃の肉）、豚拍（豚の肢の肉）、飾食（ウスカユ）、糝食（コナガチ）、が盛られて配位の供桌は篚の中の玉（璧）を除く他、正位と同樣な陳設であつた。

又、神前の爵は正位、配位に匏爵が用ひられたが、これは椰子の實を二つに割つたもので、天地兩壇の正位、配位のみに用ひられた特例で、從位には、陶爵と琖と云ふ磁製青色の盃とが供へられた。それから從位の陳設も大體に於て同樣で、籩豆の數の異ることが主なる差異であるが、ただ諸星及び雲雨風雷の供桌に於いては、太羹と共に和羹が用ひられて、鉶と云ふ器に盛られてゐた。

このほか神位の左右と神座の前方とには、燈を設け、正位の俎の前には特に石製の五供（香爐、燭臺二、花瓶二）が置かれる樣な他の壇に見られない例があつた。

祭祀に先だつて、天子を始め祭祀關係の諸官は、一定の齋戒に服したのである。

これは大祀三日、中祀二日、群祀一日の制で、卽ち祀天の祭祀には前後三日の齋戒があつたが、この時天子は前二日を宮中の齋宮に於て致齋せられ、後の一日は早朝天壇に幸して壇內の齋宮に於て齋戒を續けられるのであつたが、當日は皇穹宇と皇乾殿とに詣でて香を上げらるるのを例としたやうで、尙この齋戒に於ては天子致齋の第一日に沐浴せらるるのみで、その他は殆んど沐浴が無かつたと謂はれ、致齋中は關係諸官、何れも胸に齋戒の小牌を下げ、官衙は入口に齋戒の大牌を掲げてその意を表し、政を視ず、刑名を治めず、一切の不淨衕樂を斷つて只管ら敬虔の日を送つたのであつた。

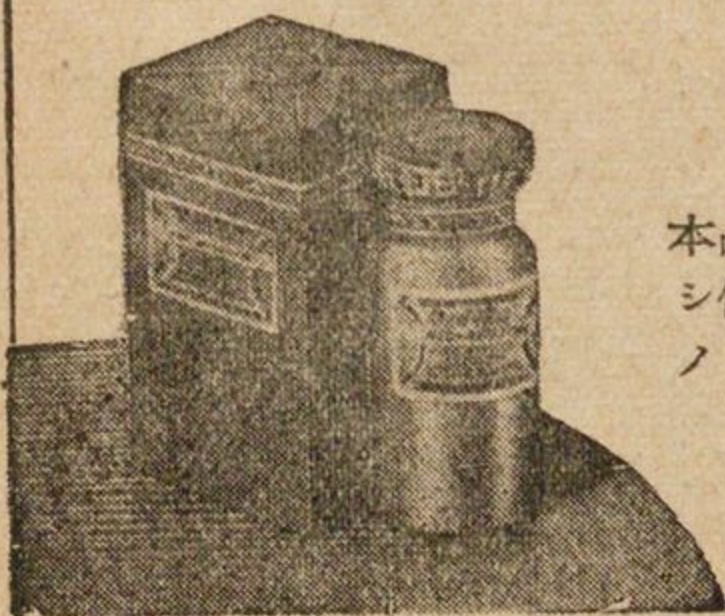
祭祀は迎神、奠玉帛、進俎、初獻、亞獻、終獻、撤饌、送神、望燎の九節から成つてゐて、各節には各〻樂が奏せられ、天子は一節每に上壇から中壇に降つて三跪九叩の禮を行はれたのである。

多至極寒の早曉、この行禮は相當に苦しいことであつたやうであるが、しかも天子の親祭を原則とするところから、高宗乾隆帝の如きは、八十有餘の高齡を以て、尙ほ親祭を續けられてゐた。

壇上の諸準備が完全に終了し、陳設が畢ると、其の前日から齋宮に宿して齋戒に服せられた天子は、齋宮の正門を出て南に進み、東に折れて昭亭門の北に設けられた大次に於て少憩して衣冠を整へられるのであるが、大次の場所は前以て地下の火坑を暖めて置くのであつた。

斯くして時刻となれば、壇下の大爐に柴を燔いて神靈を迎ふる迎神の儀が行はれ、引き續いて其の後の諸禮が執り行はれて、前後約一時間を費して終るのを例としたと云ふが、天子は最後に撤饌を爐に入れて焚化する望燎の儀を畢つて退出されるのである。

祭祀の終了するまでは一切の燈火を用ひぬ制であつたため、西南の壇隅に掲げられた三基の燈杆上の光が多の曉の闇に微かに輝いて僅かに方位を辨ずる用をなしたのと、壇下東方の燎爐に燃える火光に依つて漸く用が辨じられたと云ふが、その代り祭祀の森嚴さは非常なものであつたと云ふ。

（筆者は北京市公署觀光科專員）

長城行

小野勝平

七月二十日。一行百數十名の人々が三等車の中に陣取つて、にぎはしく話合つてゐた。華北交通の資業局の人々とその家族とが、この日皇軍の慰問傍傍八達嶺に萬里の長城を大觀せんとするのであつた。

靑龍橋に着いたのは午後一時少し過ぎ。ギラギラする直射日光が焼けつく許り暑かつた。鐵路に沿ひ乍ら、ものの數丁も歩いたであらう。隧道の手前で右にそれ、附近の平地で一先づ休憩することとなる。

チクリ、何物かに刺された。恰も地蜂にやられたやうな痛みだつた。あ、蝎麻の刺だ。蝎麻と云ふのは蓬に稍〻似た植物で、莖や葉に一面の小さな刺があり、何氣なくこれに觸れると、しびれるやうな痛みを覺へる。昨年五臺山で初めて知り、その地特有の植物かと思つたのであるが、これでみると相當廣い分布を持つてゐるのであらう。

大した勾配でない坂道を登り、山ひだに沿うて二三度曲ると其處が既に北口の關址であつた。北口とは南口に對する謂ひである。天下九關の一と稱せられる居庸關は大行山脈中に位置し蒙疆と河北とを分かつ險要であつて、車窓からも既にその故址を臨むことが出來たのであるが、實はあの居庸關を中心とし、北に北口をひかへ、南に南口を擁する三重の關門を形成して居るのである。關門は想像してゐたやうに大規模ではない。

長城の壁は、場所に依つて高さ二十尺或は三十尺もあらう。大きな切石をもつて積み上げ、上部の女牆に塼を用ひてゐる。女牆と云ふのは壁の兩側の鋸歯形の部分である。通常の城壁の場合だと外側のみしか設けられて居ないがここでは兩側にある。壁の廣さは二十尺前後、上面に方磚が敷き詰められてゐて、歩行することが出來る。或る距離を置いて墩臺が建つてゐる。

墩臺は一に烽火臺とか望樓とか云ひ嘗つて此處に見張りをし、敵が近づけば烽火を揚げて急を知らせ、兵器を取出して彼等を撃退したのである。又處行に通道と稱する暗道がある。それは壁外へ下りる通路なのだ。

惟ふに萬里の長城と大運河とは、世界に比類の稀な大土木工事である。恐らくその年代と規模の點に於て右に出るものはあるまい。大運河は普通隋の煬帝の開くところと云ふが、既に春秋時代に長江と淮水とを結ぶ運河が呉の國に依つて造られ、それから漸次開鑿せられ、利用される樣になり、南北交通や物資運搬に多大な利益を齎した。それが隋代、高勾麗を遠征する爲に更に今日の開封附近から河北の涿州地方に至るものが開かれることとなつた。併し、今日の所謂大運河は主として元代に出來たものである。

元は北京に都を奠め大都と稱した。北方は物資が不足し、特に穀物に就ては南方に依存せねばならなかつたので水運の利用が極めて重要視せられた。かくて寧波に初まり長江、淮水、黄河等の水流を連らね、天津に達し、更に白河を溯つて通州に至り、そこから再び運河に依つて北京に至る水路が當時完成されたのである。

これと同様、萬里の長城も亦、普通秦の始皇帝の造つたもののやうに云つてゐるが、その時代より更に二百年も前に初つて居るのである。春秋末期から戰國に亙つて、列强諸國では他の侵掠を防ぐ爲に盛んに邊境に城壁を築いた。

燕や趙の如き北狄と隣接した諸國では特にその防備を嚴にした。それが始皇の長城の基礎となつたのである。彼の天下統一に依つて今迄の個別的なものが聯絡され、本土内のものはさしたる必要がなくなり、北邊の長城修築に專ら意を注ぐこととなつた。

當時の長城は、遼東に起つて隴西に終つてゐる。今日の長城に比較すると更に外邊に位置してゐたのであつて、直接これとは關係がない。その後、漢代から南北朝、降つて隋代に及ぶ迄、歴代盛んに築造した。かくて今日の長城線は北齊以後隋代に及ぶ間に於て大體出來上つたものである。併し河北省と滿洲或は蒙疆との間に現存する長城は實はもつと新らしい。それは明代のことで、而も主として中葉以降の場合が多い。我々が今立つてゐる八達嶺附近の長城も亦明代築造のものである。

長城は何故築造されたか

偖て、長城は何故築造されたのであ

らうか。それに就ては種々の見解もあるのであるが、要するに家を守るのに垣を結び柵を施す思想が發展したものに外ならない。即ち家が聚つて都會を造ると更にそれを守るために長城を築いたのである。

支那に於ける城郭の起源は何時頃のことであるか明確にはされてゐない。「淮南子」に依ると、墻を築いたのは舜の時であり、「博物志」には禹が初めて城郭を造つたと記してゐる。これは遠かに信じ難い說話に過ぎないことは云ふ迄もない。恐らく漢民族が黃河の中流地方に於て初めて定住して農業を營むやうになり、やがて聚落が發達するや、城郭が築造されるやうになつたであらう。

さて、當時彼等の周圍には、同じ種族であり乍ら未だ狩獵や牧畜を專らにして居たものが尠くなかつた。そして生活形態の相違のみならず言語なども通じ難い場合が往々にあつた。一歩先んじて農耕生活に入つた連中は、自分は華人であり、彼等は夷狄であると稱して、所謂華夷の區別を立てたのである。彼等は初め小さな部族的國家を造り、やがて夏とか殷とか周とか云ふ王朝に依つて封建的態勢の下に統一されて行つた。

春秋から戰國時代には周室の統制が衰へ、五霸とか七雄とか稱せられる國國が互に雌雄を爭つた。これは一面から見ると、如何にも暗黑時代の如き感を抱かしめるが、實は、この間に於て社會的文化的發達の著しいものがあつた。かくして今迄遊牧や狩獵を本職としてゐた部族も漸次征服され、或は驅馳され、或は同化され、この間に於て自ら漢民族圏が形成されたのである。

戰國時代には、趙、燕、秦等の北邊に位置した諸國では、北邊の開拓に着着たる成果を收め得たのである。然るにさうした結果として部族的相違でなく種族的に根本から相違した人種と遭遇し、交渉を生ずることとなり、ここに東洋史上に於ける宿命的な衝突が惹起するに至つた。そのはじめに現はれるものが林胡、樓煩、次いでは匈奴或は東胡と稱せられるものである。彼等の住地は支那本土の肥沃なのに比較すると、氣候は酷烈で、土壤も疲瘠である。そこは農耕定住に適せず、遊牧狩獵生活が條件づけられて居た。從つて物資は缺乏し、生活は素朴で、尙武的な精神に富んではゐるが、文化の程度は低い。彼等は漢族の蓄積した富に垂涎した、否、漢族の物資に依らなければ生活が補はれないのであつた。

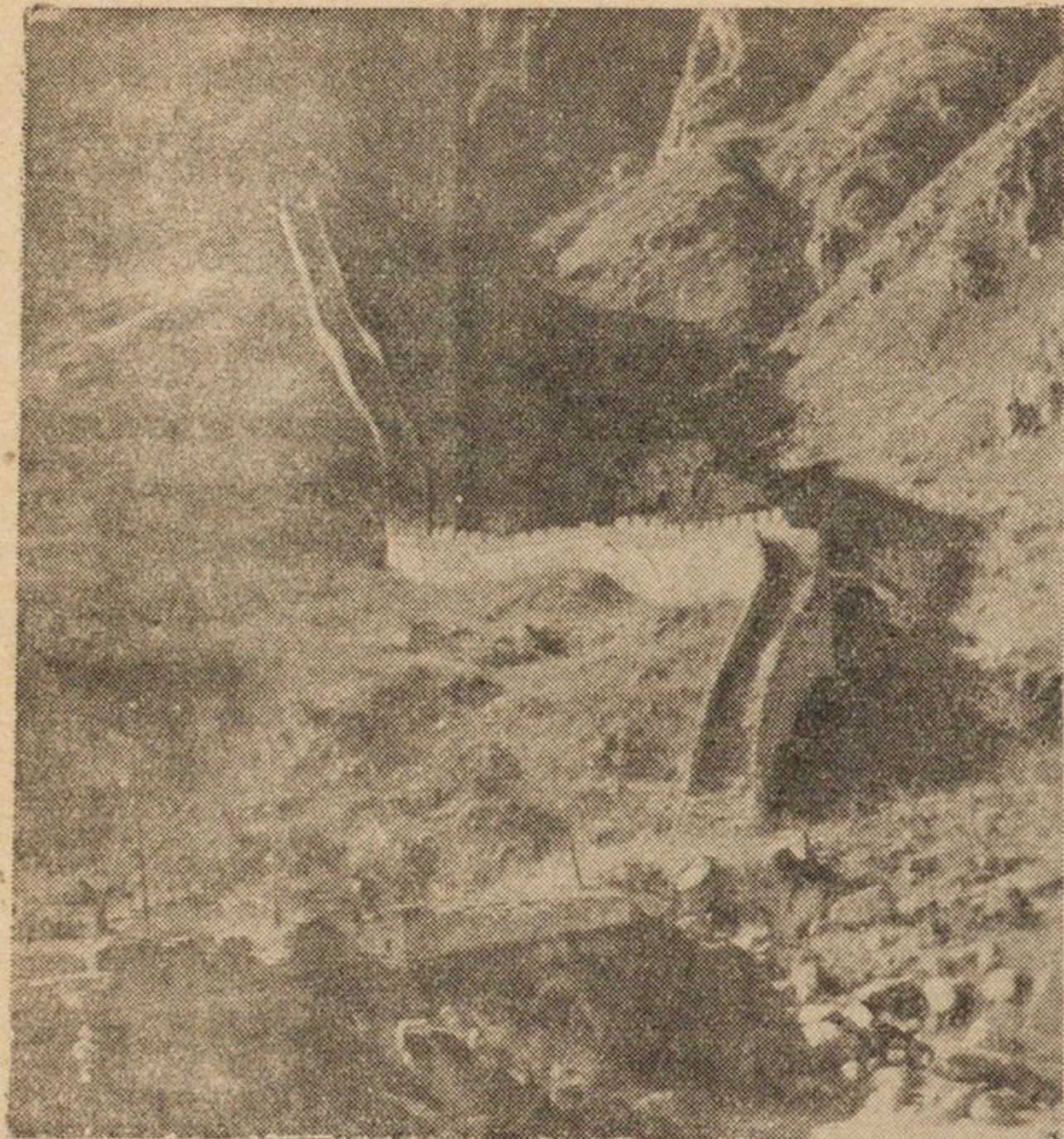
彼等は相手が與し易いとみれば騎馬によつて侵寇し掠奪行爲をほしいままにするのみならず、相手が弱くなくても必然的にかかる行爲に迫られたのである。されば、萬里の長城は實に彼等北方民族の侵略の煩に耐へず、それを避けんがために築造したものに外ならない。

漢以後、唐代に及ぶ迄、北方民族の間にも興廢消長があつて、その稱する名稱は必ずしも同一ではない。即ち匈奴に次いでは鮮卑あり、柔然あり、突厥あり、廻乾あり、彼等は今日の蒙古族或はトルコ族、更に又ツングース族等に屬するのである。

南北二大民族の對立抗爭

かかる南北二大民族の對立抗爭は、長城線を境として近世に至るまで繼續して行はれた。而も漢民族にあつては長城を境として極力彼等の侵入を防がんとするにあり、北方民族に於てはこれを乘り越えて內地深く侵寇せんとした。一は消極的であり、他は積極的である。勿論支那の君主と雖も只坐して徒に北族の侵入を待つてゐたものばかりでない。王朝創建當初の明君にあつては自ら陣頭に立つて深く胡地に入りその根據地を衝くか、さもなければ百

戰の名將に命じて彼等の討伐を行はしめて居るのであつて、その例は枚擧にいとまがないのである。

その間、北方民族に於ても侵略の樣式に變化が見られる。それは舊時に於ては侵略するも一度その目的を逹したならば匆々故地に引上げるとか、或は和蕃公主と呼ばれる皇室の女子の降嫁や貢物の下賜等に依つて甘心したものである。然るに近世以降に於ては、民族的自覺が强烈となつて、上述の樣な懷柔策には容易に乘らず、一度侵入するや、永くその地に占據して政治的支配を行ふ樣にさへなり、どこまでも漢民族なり、漢文化なりに對立した自覺に立たんとした傾向が强かつたのである。勿論かかる傾向は、既に五胡十六國から南北朝時代にも無いわけではない、然し當時にあつては政治的支配を行つたとしても、概して漢文化に對して心醉同化し、動もすれば個有の精神を忘却するのみならず、却てそれを嫌惡する場合すらあつたのである。

五代時代、契丹族の建設した遼は、今日の河北省の東部から晉北察南地方に及ぶ所謂北邊の十六州を支配する樣になり、それに代つて女眞出身の金は、北支全部に君臨した。更にその次に現はれた蒙古の元朝では、支那四百餘州を遂に己が手中に收めるに至つたのである。かくの如く北族が勃興して、遼金元と相次ぎ支那を制御した場合には萬里の長城も殆ど無用の長物と化したと云つて差支へがない。然るにやがて明は天下を統一し、蒙古を故地に追ひ拂つて、中原をば再び漢族の世界にとり戻した。

ところが、故地に於ける蒙古族は當時も猶勢力を保有してゐて、この儘放任するに於ては明の安危に係はるありさまであつた。そこで永樂帝の如きは前後五回に亙る大遠征の師を興し、遙かに外蒙古方面に至つて居る。それと共に邊境の警備に努めたことは想像する迄もなく、いたる處に墩臺を築き或は長城を修築して彼等の來寇を防禦したのである。その後、英宗も亦親征の兵を率ひ、自ら陣頭に立つたところ、却つて敵酋也先汗のために捕虜とされるやうなことすらあつた。これが所謂土木の變であつて、今を去る五百餘年前、京包線土木堡で行はれた著名な事件である。也先の歿後、一時蒙古の來寇は休息したかの感あつたが、嘉靖から萬曆時代に再び俺答汗と稱する者が現はれた。彼は陝西、山西のみならず河北にも侵入して、北京附近に迫り、京師戒嚴の鐘の響いたことも、一再に

青柳橋附近の長城

止らなかつた。當時北虜南倭と云ひ、北方からは蒙古が迫り、海岸では倭寇が猖獗を極めると云つた次第で、明朝もこれが防禦に殆んど寧日がなかつたのである。八達嶺附近の長城も、かかる情勢の下に於て眞劍になつて修築したものに外ならない。

思ふに長城の築造法は、古代には泥を積みあげるか、乾燥煉瓦を用ふるか、時に又石等を使用した場合が多く、煉瓦を使用することは特殊な場所或は場合を除くの外は殆んどなかつたと考へられる。今、此處に見るが如く切石を用ひ、煉瓦を積むことは近世以後、特に明代行はれた方法である。而もこの方法と雖も亦當代築造の長城線全部がさうであつた譯ではなく、單に乾燥煉瓦を使用して居る場合もある。しかしその地域は比較的小部分の樣である。從つて、條築に際し如何に莫大な經費や勞力が費されたであらうかと云ふことは、殆んど數學的に現はし難い程のものであり、このことが一面北族侵略の禍の如何に恐ろしいものであつたかを證明するに充分である。

あたりを俯仰すると、一方には層々たる翠轡が蒼空を摩し、峰から峰を連る長城は、蜒蜿長蛇のやうに延びてゐる。他方を俯瞰すると、懷來の盆地が手にとるやうに見渡される。そして、耳を傾ければ風に乘つて何處からともなく胡笳の音が聞えるかに思ふ。

清朝興起して全支に君臨し

偖て、清朝が滿洲の一隅に興起し、全支に君臨する樣になつてから、再びこの長城も不要となり、本來の意義が失はれるに至つた。そして現在では旣に全く一つの史蹟となつてしまつた。

その理由は云ふ迄もなく金や元と同樣非漢族出身たる滿洲族に依て清朝が建てられたからである。これと共に明の中葉迄猶慓悍であつた蒙古族が漸次尙武的精神を失つたことも原因する。

蓋し、蒙古人は明末以來甚だ溫和な民族となつた。それは喇嘛教の信仰とか旗地の制約とかが與つて力ありと云はれてゐる。併し、彼等の間に喇嘛教崇信が盛となり、黠茶膜拜をこととし旗地が制定され、それに依つて活動が出來なくなつたとしても、これのみを以て彼等の尙武的精神が喪失したものだとは考へ得ない。清初外蒙古地方は未だ朝廷の宗主權を認めず、朝廷の威令がその地に及ぶ樣になつたのは康熙帝が噶爾丹汗を親征した結果である。

噶爾丹汗は、當時外蒙地方に占據し漸次大勢力を結成するに至つてゐた。若しそのまま放任して置くならば、內蒙を失ふばかりでなく清朝に對しても大なる禍根となつたかも知れない。さればこそ康熙帝の親征をみたのであつた。康熙帝が最も力を注いだが、雍正帝にしろ、乾隆帝にしろ喇嘛教を擁護し、これに依つて蒙古人や西藏人を懷柔せんとしたことは今更論ずるまでもない。逆說的論法を以てするならば喇嘛教保護の政策をとつたのは猶、蒙古人の勢力が强かつた結果だつたと云ひ得るのである。それは淸末になつて殊に西太后などの喇嘛に對してとつた冷淡な態度から推して理解出來る。

清朝では漢族を統禦する必要上、若しその宗主權を奉持するならば蒙古民族が尙武的で居て、一度抗滿興漢の氣運が表面に動く樣な場合ほんたうの身內となつて、一致團結その彈壓に努めて異れることを希望したのである。從つて、發祥地たる滿洲のみではなく、今の蒙疆地方も亦皆禁地とした。そして支那の農民が移住し、そこに於て農耕生活を營むことが嚴禁されてゐたのである。然るにさうした嚴禁にも拘らず、早くも明末に初つた支那農民の長城外移住が、清朝の平和と共に漸次盛んとなり、これと共に商人の至るものも多かつた。その結果、一面牧地は減少し、他面、經濟的壓迫が益々加はつた。それらのことが蒙古民族沈滯の一層甚だしくなるに至つた大きな原因をなしたのである。

この他、東亞交通路の變更と云ふことも一原因であつたと考へなければならない。海運が發達しない近世以前に於ては、東亞交通は主として大陸を通じて行はれたのである。

而も、かうした交通に依つて北方民族が直接間接經濟上の利益を得たばかりでなく文化上に於ても亦、敎へられるところの多かつたことは想像に難くない。鐵の如きも、銕と書き、それによつて推測せられるやうに、曾つては北方民族の手を通じて支那に輸入されたものと解せられる。特に蒙古帝國の出現に依て陸上交通は黃金時代を示した。蓋し當時に於ける蒙古人の見聞は東西兩洋に亙つてゐたのである。然るに明代になつてからは、それが殆んどと云つてもよい程衰退し、海運に依るやうになつてしまつた。

若し、成吉思汗程の英雄でなくても俺答汗が崇禎時代に出現したのみでももう少し歷史的舞臺が相違してゐたかも知れない。

（筆者は華北交通資業局資料室員）

可園雜記

加藤新吉

中門の內、院子の左右兩棟を廂房といふ。西廂記は張珙と崔鶯鶯との戀物語、美人鶯鶯が月を西廂に待つといふところからその名がある。私のところの西廂は大半がらくた道具が詰つてゐるので、戀物語どころか可園雜記の種子にもならない。尤もこの西廂は、舊くは一家だつたといふ西隣と墻一重で續いてゐるので、絕對に西陽がささず從つて夏は涼しいといふだけの取柄はある。

廂房は東西とも三間で、前面に柱廊をもつてゐる。一間は間口十尺、奧行十四尺、室內面積十二坪弱である。床は塼。眞中の一間は通路で、內外二重の扉。外の扉は一枚、高さ五尺五寸、外開き。內の扉は二枚、高さ八尺、內へ開く。通路以外の二間は下部三尺の壁、その上三尺の硝子窓、その上三尺の障子窓、その上又二尺の障子窓。これ等の構造はどの棟もほぼ同じで、窓と扉の木組が美しく、內から外の陽を透しても外から內の燈火を眺めても何れも趣ふかいものがある。

院子から東の廂房を通り拔けると廣い庭園に出る。この廂房はその西側よりも更に廣い廊—屋根と柱列とのあるポーチを庭園に面してもつてゐる。小徑はそこから右へ築山の下をくぐる石の洞門、左へ池に架けた石の小橋へ續く。ポーチの前面はおふくかづらをからんだ太湖石、槐の若木やかぢの木や丁香の茂み、兩横は各周圍十尺の楡の老木。これは私の住居のうちで最も風致に富んだところ、崔鶯鶯が月を待つによく、林黛玉が雨に泣いてもふさはしくないことはない。

夏から秋へかけてこのポーチに食卓を置く。食卓は雅客俗客で賑はふ。小說の主人公になるやうな美人はめつたにやつて來ないが、華北交通の逞ましい靑年社員が二三十人も集ることはある。今年の仲秋は、生憎無月であつたが、小林古徑、梅原龍三郎、長與善郎矢代幸雄などといふ東京からのお客さま方が一夕をここで過された。

寒い時、埃の多い季節には、東廂を食堂兼茶の間に使ふ。そこから窓越しに見る景色も爐を圍んで聞く風の音も惡くはない。併し、白紙で貼り潰した壁は北京では普通ではあるが、殺風景たるを免れない。金をかけないで何とかならぬかと工夫はしてみるものの、なかなかうまくゆかない。一方の壁は食器棚でかくして、その上に時計と壺とを載せた。他方の疊の間との境の壁には皿を懸けた。嘉靖の染付と康煕の赤繪の美しさで多少ごまかしがきいてゐる。支那人が自分の書いた書や畫を謙遜して補壁といふのは、かういふところに懸けよといふのであらう。

東廂三間の內一間を四疊半と三疊に作つた。四疊半といつても八尺七寸に八尺三寸の間で寸足らずの疊ばかり入つて居り、ただ爐があるといふだけの席であるが、家人はこれを永日庵と號し、五錢十錢の苦力茶碗をもち出しては鹿爪らしく茶を點てて居る。宗徧流家元宗有宗匠ここに座つて、まことに結構でと挨拶したといふから、これでまことに結構なのであらう。何分この小天地だけは家人が主人であるから、本來の主人は批評を差し控へることにして置く。時に門前流と稱して異說を立ててはみるが、門前流や鞍馬流はお茶の方では駄目だと一蹴されて、一向に威令行はれないのである。

(筆者は華北交通資業局長)

支那關係圖書紹介（3）

二、經濟地理關係

1.經濟資料

先づ滿鐵資料課から出た**北支綜覽**―大連大同印書館扱―は、事變前のものではあるが、貴重なものである。この後を承つて、滿鐵や軍の資料を基にして東洋事情研究會の**北支通覽**―昭和十二年八月―が出てゐる。右の二書によつて、事變發生直前の狀況を基礎的に見て置くことは是非必要だと思ふ。

尙外に同樣な意味に於て、馬場鍬太郎氏の**北支八省の資源**や倉田勉氏の**北支大觀**等があるが、以上の資料の補正として、昭和十五年大連商工會議所から出てゐる**北支經濟圖說**や、北支開發會社及び同社系統各社の各種月報が便利である。尤も事變後の數字は公開されないものが多いので、甚だ不便である。

中南支の方も二三あるが先づ景氣研究所の**中南支經濟總觀**―千倉書房―が便利である。

商品學的な意味で、內山清氏の**貿易上より見たる支那風俗の研究**は大いに參考になるが、惜しむらくは稍ゝ古いので、古本屋にしか求められぬ。

又、華北交通の水野薰氏の**北支名物夜話**は動植物質の物產―農牧產の紹介として、通俗的に面白い。併し、未だこの方面の全般的なものはない樣である。

宮崎氏の**滿洲支那經濟事典**を增補修正した樣なものや、古い同文書院の**支那經濟叢書**が改訂された樣なものは今後に望まれるだらう。

2.經濟解說

支那一般經濟の概略の智識を基礎附けるためには、ウイツトフオゲルの**支那經濟史の研究**―叢文閣―や、紀肇延のを譯した**支那經濟史分析**―白揚社―を素讀して置く必要がある。同じく、サハロフの**支那社會史**も參考されねばならぬ。右の史的解說の後、濱田峯太郎氏の**支那經濟槪觀**は事變前の狀況の解釋に有益なものと思ふ。もつと解り易い處では、小島精一氏の**支那經濟讀本**―千倉書房―がある。そして何幹之のを譯した岩波新書の**支那の經濟機構**を讀まれたいとお薦めする。

支那經濟の最も根幹をなす處の農業經濟に就ては、有名なバツクの**支那の農業**―改造社及び生活社の二版あり―があり、その外ではマヂヤールの**支那の農業經濟**―白揚社及び學藝社の二版あり―がいい。右の二書に依て基礎的な農業經濟の智識は十分過ぎると思ふが、更に農村問題としては、費孝道の**支那の農民生活**―生活社―や薛暮橋の**支那農村槪評**―叢文閣―を讀まれたら面白いだらう。

他の各種產業及び交通等に就ても述べたいが頁が足らぬので割愛して、最後に右の經濟現象を地理的に書いたものを物色してみる。

最も廣く讀まれてゐると思はれるのは、クレツシイの**支那の地理的基礎**の日本譯―三つあり、各ゝ譯者が違つてゐて偕成社版の如きは**滿洲支那土地と人**となつてゐる―である。專門から云はすれば、學術的ではないし又學術的に新しい系統を打ち立てたのでもないが、支那をよく步き廻つた著者の强味とアメリカの先生らしい通俗的に早解りする手際のよさとは有難いものと思はされる。譯者は共に地理的な造詣の點に於て不滿な箇所が數箇所指摘されるのが惜しい。

この原著に賴り更に他を參照しつつ書かれたのが馬場鍬太郎氏の**支那經濟の地理的背景**―同文書院―である。

次にエムカザーニンの**支那經濟地理槪說**―日本評論社―がある。手頃によく纏つてゐる許りでなく、ロシヤの先生らしい好い見方がなされてゐる。

近頃西山榮久氏の**支那經濟地理**と云ふのが出てゐるが、面白くない許りでなく、不正確な處がある。大體支那の敎科書や地圖說明の利用更生と思はれる。又、岩波新書にグルーシヤコフとか云ふ人の**支那經濟地理**といふのを譯してあるが、岩波としては面子に係はると思ふ程面白くない陳腐なものだ。これに反し、佐藤弘氏の**興亞經濟地理**と云ふラジオテキストの方が確に經濟地理的にいい內容を持つてゐる。

十二月號（毎月一回一日發行）

昭和十六年十一月十五日印刷納本
昭和十六年十二月一日發行

編輯者　北京・華北交通株式會社資業局　加藤新吉
發行者　東京市麴町區三番町一　長谷川巳之吉
印刷者　小石川區久堅町一〇八　共同印刷株式會社　大橋松雄
發行所　東京市麴町區三番町一　第一書房
振替東京六四二二三番　電話九段（33）三一四一・三三四一・四五番

會員登錄番號一一六五〇八番

一冊定價㊕三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分　金三圓六十錢

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

廣告取扱　一手取扱所　大阪市西區京町堀上通一丁目二五　一新社　電話土佐堀九三九

NISSEN

寄生性、瘙痒性 皮膚病に

ムナバールは化學的に合成したる有機硫黄化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。

【特徴】

一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。

一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。

一、品質純良にして約二六%の硫黄を含有す。

適應

疥癬・頑癬・濕疹一切 白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰囊頑癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性及皮膚諸疾患

包裝

一〇瓦(瓶入)
二五瓦(〃)
一〇〇瓦(〃)
五〇〇瓦(罐入)
一〇〇〇瓦(〃)

製造發賣元 日本染料製造株式會社
大阪市此花區春日出町

一手販賣元 株式會社 稲畑商店
大阪市南區順慶町二丁目

日染

ムナバール